
バカとテストと男の娘

キモヲタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと男の娘

【Nコード】

N2231P

【作者名】

キモヲタ

【あらすじ】

和物が異常なほど好きで、言葉使いは男だが何処からどう見ても女性の麗人にしか見えない菊井慧汰、

振り分け試験でちょっとミスしてしまい文月学園最低学カクラスのFクラスに入る

一年の時から仲間や新しいクラスメイトによるhurtful
rough storyが始まります、現在更新予定日 超不
定期 感想、アドバイスお待ちしています

問1 バカと始まりと振り分け試験(前書き)

この作品は主の初めての作品(処女作)ですので生暖かい目で見てください

問1 バカと始まりと振り分け試験

「では……初めて下さい」

これが振り分け試験か

パン！！自分の顔を軽く叩いて気合を入れる

カリカリカリカリカリ

ヤバイな、昨日徹夜したからろくに睡眠もとれなかった分が最初からくるとは……

「ハア……………ハア……………」

見るからに辛そうな声が聞こえる

カラン…………カラカラ…………

ガタン！！

シャーペンを落として倒れるピンクの髪の子生徒

「姫路さん！？」

近くにいたバカ、もとい よしこあき 吉井明久が女子生徒に近づくと

「試験途中での退室は『無得点』扱いと……………ね？」

「ちょよ、ちょつと先……！……合が……」

眠気のせいで向こうの様子もよく分からない、ただ明久が必死に訴えようとしていることだけは分かった

だがそこで俺は睡魔に負けて意識を手放した

問 以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

4

姫路瑞希の答え

問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例・・・ジュラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんはひっかかりませんでしたね

きくいけいた
菊井慧汰の答え

問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為
危険であるという点

合金の例・・・オリハルコン

教師のコメント

問題点は合っていますが、現実を見てください

土屋康太の答え

問題点・・・ガス代を払っていなかったこと

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

合金の例・・・未来合金（　すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても

今年で文月学園に入学して二年目になる春

この学校は少し変わったシステムでできている

それは『召喚システム』と言いテストの点数に応じた強さの召喚獣
が出すことができる

戦うことができるシステムだ（ちなみに召喚獣は偶然出来たらし
い）

しかし召喚獣は教師の立会いの下でしか行使できない

そして召喚獣を使い、生徒の勉強に対するやる気を上げるために『
試験召喚戦争』と呼ばれるクラス単位の戦いがある

試験召喚戦争の詳しい説明の前に文月学園の『クラス』について話
すしよう

文月学園にはクラス、2年生以上の生徒は振り分け試験の成績順で
Aから順A、B、C、D、E、Fにクラスが決まる。

クラスのランクが下がっていくと設備も下がる

しかし下のクラスが上のクラスの設備を手に入れられることが出来
るがある、それが試験召喚戦争 通称試験召喚戦争

試験戦争を行い、上位クラスが下位クラスに戦争で負けた場合、ペ

ナルティとして上位クラスは下位クラスと設備を入れ替えなければ
ならない。

仮にBクラスがEクラスに負けたら、Bクラスの設備がEクラス仕
様になり、Eクラスの設備はBクラス仕様になる。

ただし、下のクラスが負けの場合は設備のランクが一つ落とされる
ペナルティがある。

BクラスならCクラスの設備に、EクラスならFクラスの設備にと
いった具合。

Fクラスが負けたらどうなるかは知らない

とまあ学校の説明を誰かにしているとその文月学園について

「菊井、今日は珍しいな一番乗りだ」

「おはようございます鉄じ・・・鉄む・・・西村先生、こっちだっ
て色々あるんですよ」

「今、鉄人から言い直そうとして新しい苗字を言いかけなかったか
？」

「いえ、何も言ってません」

「……そうか」

危なかった、この人に面と向かって『鉄人』って言いかけた

ちなみに鉄人は生徒間での西村先生のあだ名である

趣味がトリアスロン、冬でも半袖まさに鉄人だな

「……なんですか？それ？」

いきなり封筒を渡されても困るんだが

「もしやさつき鉄人って言いかけたのを聞いて果たし状を！？」

「やっぱり言ってたんじゃないか……と、今は置いといてテストの結果だ」

「振り分け試験の結果が、別にいいです渡さなくてどうせFですから」

「まあテストの、それも振り分け試験中に寝る奴は開校以来一人もいなかったからな」

そりゃそうだろう、俺もビックリですから

「まあ、一応もらっときますそれじゃ」

鉄人から封筒を受け取って校舎へ入る、一応確認したがやはりFクラスだった

「これが、教室？」

三階に足を踏み入れると巨大なAクラスの教室が出迎えていた

窓から中をみると冷蔵庫やら、各人にエアコン、ノートパソコン、リクライニングシートさらに絵画や観葉植物も置いていた

「本当に教室か？」

つい本音が出てしまう、それぐらいにすごい設備だった

そして少し自分のクラスの設備が気になったので、急いで自分のクラスに向かった

問1 バカと始まりと振り分け試験(後書き)

これって二次創作ですらない気がします……

誤字脱字、ありましたら連絡よろしくお願いします
よければ感想もしていただけると嬉しくて泣きます

問2 俺とクラスメイトと自己紹介(前書き)

問1だけだとあまりにも少ないので続けて投稿させていただきます

問2 俺とクラスメイトと自己紹介

問

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

菊井慧汰の答え

- (1) 弘法も筆の誤り 河童の川流れ 猿も木から落ちる
- (2) 泣きつ面に蜂 踏んだり蹴ったり 弱り目に祟り目

教師のコメント

正解です。しかし菊井君、完璧ですが答えを一つにして下さい
解答欄が小さすぎてかなり見づらいです

土屋康太の答え

(1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね

吉井明久の答え

(2) 泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか

勢いよく扉を開けると、畳に卓袱台ちゃぶだいに座布団が目に入った

確かにAクラスの設定から見たらボロボロで隙間風が吹いていて、かなりグレードダウンしてるいが俺はテンションが上がっていた、

なぜなら

「和室……だと!?!」

そう和室だからだ、やっぱり日本人だし和室が一番落ち着くだろ?

まだ ホームルーム HRまで時間は30分くらいある、せつかくの和室なんだから寝転がって寝るか…

そうと決まればクラスに入り皆の邪魔になりにくい所に行き自前の枕を敷いて寝た

カビ臭いけど気にしないければいい

……

「……おき………きろ!慧汰起きろ!」

誰だ俺の安眠妨害した奴、狸寝入りだ

「これでも起きないか、…起きろ女男!!!」

「女男じゃねえ!男だ!」

俺が女男と言われたのはこの容姿からだ

男なのに筋肉があまりつかず細身で少し華奢肌も白い、どれくらいかって言つと普通の細身の女性より少しくらい、

身長は168で髪は真っ白で後ろ髪だけ背中にかかるくらい長く他は肩にかかるくらい横髪とちよつと目にかかるの前髪

さらにこの顔が女っぽい（顔の割合 凛々しい女性99%：凛々しい男性1%、提供ムツツリ商会アンケート ちなみに秀吉は女の子100%：男の子0%）

瞳はスカイブルーとでも言うつかよく綺麗な目をしていると言われるしかしこの顔のせいで昔塾帰りの時に酔っ払ったオッサン共にナンパされたりチャライ不良にもナンパされた

今も気にしてる事を言われてムカついたのでスタンガン（20万ボルト）を投げる

「たく、こんな物がなきや喧嘩売れないのかよ」

俺がスタンガンを投げ、その投げたスタンガンを捕った男は教卓に立っていた

「……雄二、ゆじ言っておくが護身術なら完璧に 何で教卓に立っているんだ？」

ニヤリと不敵に笑ったその男、坂本雄二さかもとゆうじは俺を見下ろしながら俺の投げたスタンガンを思いつきり投げ返してきた

しっかり電源入れているので避けたいが、折角の畳が傷つくので捕る

「俺がこの教壇に立っているのはこのクラスの最高成績者だからだ」

「まじで?」

心底信じられなかった、否、信じたくなかった

「何でよりによってゴリラが……」

坂本雄二、去年から同じクラスで変な接点があつて喋る事が多かった
身長は高く、服の上からでも鍛えられているのがよく分かる

「喧嘩なら買つぞ？」

「二人とも落ち着けい」

少し右を向くと美少女が・・・いや美少年が座っていた

独特の言葉使いと小柄な体。肩にかかるか、かからない程度の長さ
の髪に女子にしか見えない顔立ち

彼（女？）は きのしたひでよし 木下秀吉、演劇部所属

「そろそろ登校時間のピークじゃぞ？」

そう言われて時計を見るとHRの10分前でFクラスにも人がゾロ
ゾロと入ってきた

もう寝るわけにいかないの、ボーっとしておこう

チャイムが鳴っても一向に先生が来ない

ガラッと扉が開かれる、先生が来たのだろ

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

入ってきたのは学校一のバカだった

「早く座れ、このウジ虫野郎」

いきなりの返答で硬直する男子、睨みつける雄二、

「聞こえないのか？ああ？」

それを聞いて頭にきたのだろう雄二に睨みつけて今にも飛び掛りそう
うだ

「……雄二、何やってんの？」

入ってきた男子は吉井明久よしいあきひさ、振り分け試験で女子生徒を庇った男子

容姿はそこまで悪くなく中の上くらい、バカの集まりであるFクラス
スの中でも教室に入ってきた時に言ったように彼は特に頭が悪く『
観察処分者』の称号を持っている

観察処分者、簡単に言えばバカの代名詞さらに観察処分者の召喚獣
は物を触れるがそのせいで召喚獣の痛みが何割か本人に返ってくる
し疲労も返ってくる

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「これでこのクラスが俺の兵隊だな」

ふんぞり返って畳に座っている俺達を見下ろす雄二

「それにしても……………流石はFクラスだね」

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

明久の後ろから元気のない声が聞こえてきた

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

多分この人がこのクラスの担任なのだろう

「はい、わかりました」

「うーす」

そうして雄二と明久は席についた

「明久、おはよう」

ちょうど俺の前の席にきた明久に挨拶をする、ちなみに明久も去年同じクラス

「慧汰、おはよう、同じクラスだったんだ…それにしてもすごいよねFクラス噂で聞いたけどここまでと」

「俺は和室だからいいけどな」

「ははは」

軽く話していると先生が何か話すようだ

「えー、おはようございます二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしく
お願いします」

担任が黒板に名前書こうとしたが、チョークがないらしくやめた

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば
申し出て下さい」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです」

それくらいいいだろう正座が辛いのだったら胡坐でもすればいい

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直して下さい」

「センセ、窓が割れていて風が強いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請してお
きましよう」

確かに後二つは酷いが、それをボンドやビニール袋、セロハンテープで対応する学校も凄いな、
流石はFクラスということか

「では自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人から
お願いします」

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる今年一年よろしく頼むぞい」

おい男子達あいつ男だぞ？あの容姿だが男だぞ？そんな目でみるな
よ、…まあしょうがないか秀吉だし

「……………土屋康太」

こいつも去年からのクラスメイト口数は少ないが運動神経は良いこ
いつも一年の頃クラスメイト

そして何人かの紹介を終えて最初で最後の女子の紹介が始まった

「島田美波しまだみなみです。外国育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書き
は苦手です、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味
は吉井明久を殴ることです」

「誰だ！？恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つ奴は！」

明久は紹介を聞いてなかったようだ

「はろはろー」

笑顔で明久に手を振る島田顔が引きつっている明久、あんな自己紹

介されたのだからしょうがないか

「あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

そうこの島田美波も一年のとき同じクラスだった あれ？一年の頃のクラスメイト多くないか？

そして気がつけば吉井の場所まで順番がきていた

「コホン。えーっと。吉井明久です。気軽に『ダーリン』って読んでくださいね」

さすが明久、皆とは自己紹介の仕方が違う

「ダアアリイーン!!」

のぶとい声の大合唱、傍から聞いている自分ですら不愉快なのに言われているあいつはどんな気分なのだろうか

「失礼。忘れて下さい。とにかくよろしく願いします」

明久は作り笑いしているのがよく分かる、辛かったんだろう

そして俺の番が来たので席を立つ

ザワツ何故か教室がざわつく

「誰だあの美人は？この俺がノーマークだと？」

「お、おい！あいつまさかムツツリー二商会売れ筋のアイツじゃないか！？」

「なるほどあれが男装の麗人か」

「まさか木下と正反対の奴がいるとは……」

何か色々気になる事言われてないか？

「菊井慧汰、部活動はしていない趣味は音楽鑑賞と歌うことと読書と寝ること」

とりあえず早く挨拶をすませる

「質問いいですか？」

「はい？いいですよ」

特に質問されることはないはずだが

「慧汰、ということとは男ですよね……？」

「そうだけど、それとこの質問は秀吉にしてあげたらいいと思うが？」

「何でワシなのじゃ！？ワシは男じゃぞ！？」

卓袱台を思いつきり叩いて全力で否定されても説得力が無いのは何故だろう

まあ秀吉が男なのは皆知っているか、自分は去年地味に暮らしていた（と思っている）から知名度はかな低い、（ムツツリーニのせい）で写真がばら撒かれていて同学年でも、知らない人の方が少ない）

男の制服着ているのに性別聞くとか思ったよりバカの集まりのようだ

ガラー！！と唐突に勢いよく扉が開く音がした

問2 俺とクラスメイトと自己紹介（後書き）

主人公がかなり空気です、これから改善していくつもりですがどうなることやら

誤字脱字の連絡、感想をお待ちしています

問3 明久と薔薇の恋愛事情（前書き）

サブタイトルは特に関係がありませんので気にせず見てください

問3 明久と薔薇の恋愛事情

問

以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y. 』

姫路瑞希の答え

これは私の祖母が愛用していた本棚です

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

これは

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

菊井慧汰

『

』

教師のコメント
訳せたものはないのですか

吉井明久の答え

*

教師のコメント
出来れば地球上の言語で。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『え?』

自分も含め皆一斉に驚いた声があがる、それはクラスにまた女子が入ったからではなく
Fクラスに絶対入るなずのない人が入ってきたからだ

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路ひめじさん
もお願いします」

「は、はい!あの、姫路みすき 瑞希みずきといいます。よろしくお願いします」

小柄な体に純白の肌に背中まで届くピンク色の髪

「はいっ!質問です!」

自己紹介を終えた男子生徒が手を上げた

「あ、はいっ。なんですか？」

いきなりの質問で少し驚いたのか小動物的な仕草をする姫路さん

「何でここにいますか？」

確かにそうだ、何故なら彼女は先ほども言ったように学年2位の實力を持つほどの成績優秀者だ、そんな彼女がFクラスにいるのはおかしいのである

「そ、その……振り分け試験の最中高熱を出してしまいました……」

去年の振り分け試験の時倒れていたが明久ががんばって弁護してくれたかと思っただが、やはり駄目だったか

「そういえば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。科学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力が出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

これは予想してたより酷いなこのクラス

「で、では一年間よろしく願いします！」

連中が漫才している中、姫路は明久と雄二の席の間の席に座り卓袱台に突っ伏した

「あのさ、姫」

「姫路」

明久が姫路さんと話しかけようとすると雄二が声をかける

明久から怨念のようなものが感じられるが気のせいだろう

「は、はい。何ですか？えーっと……」

すぐさま雄二の方に身体を向ける姫路

「坂本だ。坂本雄二。よろしくと頼む、それとその女男が」

「誰が女男だ、俺は菊井慧汰、よろしく」

「あ、姫路です二人ともよろしく願いします」

俺と雄二にペコリと頭を下げる姫路さん

「ところで、振り分け試験の時に倒れていたけど体調は大丈夫なのか？」

「あ、それは僕も気になる」

やはり明久はあの時の事気にしているようだ

「よ、吉井君!？」

明久に声をかけられることがそんなに傷つくことなのか

「姫路。明久がブサイクですまん」

雄二が珍しくフォローするのかと思っただらやはりいつもどおりの追撃だった

「そ、そんな!目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!その、むしろ……」

なるほど、姫路さんは明久の事が好きなのか、フォローからしてそうだろう

「…明久、良かったな」

「え?何が」

ポンと明久の肩に手をおいてエールを送る、しかしあれで分からないのか、あいつ結構鈍感なのかもしれないな

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔しているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味持っている奴がいたような気がするし……」

「ああ、あいつだろ?」

俺と雄二は少し笑ってしまっ

「え？それは誰」

「そ、それって誰ですかっ!？」

間違いない姫路さんは明久の事が好きだ

「えっと、久保 利光だったかな？」

久保利光

(性別ノオス。決して間違えていない)

「……………」

ふるふると体を小さくして声を殺しながら泣く明久

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

やはり心に相当ダメージがきたのだろう

「大丈夫だ1割が冗談だ、安心しろ」

「え!?!9割とか安心できないよ!?!嘘だよね!?!本当は嘘なんだよね!?!」

「当たり前だろう?。」

「よかつ」

「全部本当だ」

さつき以上に大粒の涙を流して泣く明久、お婿にいけなとか聞こえるが気にしたら負けだ

「ところで姫路。体大丈夫なのか？」

俺と明久を無視して話かける雄二

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「なら心配いらないな」

「はいはい。その人達、静かにして下さいね」

バンバンと教卓を叩いて注意する先生

「あ、すみません」

ガラガラガラ……突然教卓が崩れ、ゴミに早変わりした、軽く叩いただけで壊れるなんて誰が予想したんだろうか

「え〜………替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう告げるとそそくさと教室から出ていった先生

「あ、あはは…」

明久の隣で苦笑いをする姫路さん

まあ確かにここまで教室が酷いとそうなるだろう

出来れば畳と卓袱台を新調したいところだ

「……雄二、慧汰ちよつといい？」

「ん、なんだ？」

「どうした？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

「別に構わんが」

「分かった」

三人とも立ち上がり廊下に出る

「んで、話つて？」

「そんな重要な事なのか？」

さすがにHR中なので廊下に人影は全く無いここなら重要は話でも大丈夫だろう

「この教室についてなんだけど……」

ん？あのバカの代名詞、明久が教室に気にするなんて…絶対何かあるな

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「確かに、あの設備（手入れされていない畳、傷ついた卓袱台、壊れたガラス）とクラスメイトの言動（主に明久）は酷いな」

今度一人で畳の新調でもするか？

「二人ともそう思うよね？」

「もちろんだ」

「当たり前だろう？」

「Aクラスの設備は見た？」

今朝の教室とは思えないほどの教室を思い出す

「あれはもはや教室じゃないだろ」

「ああ凄かったな。あんな教室は他に見たことがない」

むしろあそこ以外であんな設備のある学校は見たくもない

むこうはディスプレイの黒板（？）でこっちはチョークすらないひび割れた黒板、不満が無いと言えば嘘になる

「そこで、僕からの提案。折角二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと？」

雄二も同じことを思ったんだろう

「うん。しかもAクラス相手に」

「……何が目的だ？」

「姫路さんの為か？明久」

「…なるほどな」

ビクッと明久が背筋を伸ばした

「え？いや、違うよ？だってあまりにも酷い設備だから」

「声震えすぎ、焦点合わなさすぎ、挙動不審すぎ、汗流しすぎ…本当に単純だな」

少し呆れる、最初に『試召戦争』をやりたい奴の理由は、設備の向上なのに明久は他人の為に『試召戦争』をしようとしている、「観察処分者」だけど救いようのないくらいバカだけど、良い奴だ

「…それに全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことありえないだろうが」

雄二がさらに追い詰めようとする

「そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが」

「本当にバカだな、まあ今に始まった話じゃないが…おまえがこの学校を選んだのは『試験高だからこその学費の安さ』が理由だろ？」

「あー、えーっと、それは、その……」

「今更言い訳は必要無いだろ？な、雄二？」

俺は雄二を見ながら少し笑った

「まあ…そうだな」

雄二もニヤリと笑った

「ま、お前に言われるまでもなく、おれ自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ」

雄二も戦争を起こす気だったのか、だが私事ではAクラスにはあまり関わりたくない

「……どうしたの？いきなり震えだして？」

「い…いや、何でも…ない」

「明久、人には聞いていい事と悪い事があるんだ」

いきなり震えだした理由を知っている雄二は擁護してくれた

「え？あ、うん、ごめん…って話は戻すけどなんで雄二が？雄二だって全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明してみたくてな」

「????」

そう言えば雄二って昔神童って呼ばれていたな…人はやっぱり分からん

「それにAクラスに勝つ作戦も思いついたし おっと、先生が戻ってきた、教室にはいるぞ。」

「あ、うん」

「はいはい」

教室に戻り、さっきの席に戻った

「えー、須川亮です。趣味は」

そして何事も無く自己紹介は続いていった

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解。」

雄二は席を立ち、ゆっくりと堂々と教壇に上がった

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

担任の問いにしっかりとうなずく

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

「さて、皆に一つ聞きたい」

何というか雄二は人を統率というか人を引き付けやすいのだろうか
今クラスは雄二のペースになっている

雄二は教室内を見わたす、それにつられクラスメイトも同じように
教室内を見わたす

手入れされていない畳

傷ついた卓袱台

壊れたガラス

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が」

一拍間をおいて、自分たちに告げる

「不満はないか？」

一瞬の静寂、嵐の前の静けさとも言うか

「大ありじゃあつ！！」

やはり皆は不満だったようだ。まるでダムが決壊したようなそんな状態だ

自分は和室だからこの教室の手入れをすれば特に不満はないが…

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱えている」

『そつだそつだ』

『いくら学費が安いからといって、この設備はあんまりだ！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろう？あまりに差が大きすぎる！』

「皆の意見はもつともだ。そこで」

皆の意見に喜んだのか、怪しい笑みを浮かべ

「これは代表としての提案だが」

「FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う」

問3 明久と薔薇の恋愛事情（後書き）

まだ主人公が空気ですね……

誤字脱字の報告

アドバイスや感想よろしくお願いします

問4 バカとクラスと暴力騒動(未遂)(前書き)

サブタイトルは特に関係していません

問4 バカとクラスと暴力騒動(未遂)

問

以下の問いに答えなさい

(1) $4\sin X + 3\cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ $\{$ $?$ $\}$ の中から選びなさい

$?\sin A + \cos B$ $?\sin A - \cos B$ $?\sin A \cos B$
 $\cos B$ $?\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

(1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) $?$

菊井慧汰の答え

(1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) $?$

教師のコメント

そうですね。正解です

土屋康太の答え

(1) $X = \frac{\pi}{6}$ およそ $\frac{\pi}{6}$

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです

Aクラスへの宣戦布告

最下層の自分たちからしたら馬鹿げた話だった

何故なら学力が全てのこの学園で下克上など、それも最下層からトップへの下克上は無理に等しい

『勝てるわけではない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

この意見は妥当だろう、負けることが分かかっていて勝負を仕掛けるのは自殺行為

もしかしたら設備もこれ以下になるかもしれない

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

何さりげなく今告白してる空気読め

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

その自身がどこからくるのか分からんが、雄二は確かに勝たせてみせると宣言した

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

クラスメイトから否定の意見が上げられる、確かに言ってることは間違っていないが

雄二が何の根拠も持たず勝たせるとい言葉を出すことは無い

「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

クラスの皆がどよめく、やはり皆は半信半疑のようだ

『Fクラスが?』

『学年最下位グループがAクラスに?』

「それを今から説明してやる」

壇上からクラスを見下ろす雄二

「おい、康太、畳に顔つけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死に否定する康太だが、頬に畳の跡とさっきの様子を皆に見られながらも否定するとは往生際が悪い

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者だ」
ムツツリー

土屋康太は有名ではないが、ムツツリー二という名前は女子に特に知られている（もちろん悪い意味で）主に軽蔑として

保健体育に関しては学年主席すら上回るほどだ

『ムツツリー二だと……………？』

『馬鹿な、奴がそつだというのか……………？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

このように証拠とムツツリー二の名前が挙げられると皆が納得する

女子が少ないこのクラスで良かったが他のクラスだと間違いなく虐められるだろう

「????」

姫路は分からないようだ。が世の中には知らないほうが身のためのも
のが多い、知らぬが仏だ

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく
知っているはずだ」

「えっ?わ、私ですか?」

Aクラストップレベル…普通に試験を受けていたら学年次席の実力
を持っているのだから当たり前だ

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらぬな』

さつきからラブコールしてる奴、空気壊しているから自重しろ

次言つたら、スタンガン首筋に使うぞ?

「木下秀吉だつている」

演劇部のホープであり、有名な木下姉妹…ではなくて木下姉弟だ

「菊井慧汰もいる」

……は？俺？

『あいつが？』

「こいつは実力で言うなら得意科目はAクラスのトップ5に入る」

『何…だと？』

「だが苦手科目が以上に低い、どれくらいかというところ……明久の頭を1倍くらい悪くしたくらい」

『それは酷いな……』

「ちょっとまった、僕の頭そこまで悪くな……ねえ。何で皆してそんな目で見えるの!？」

「気づいてないところが性質たち悪い」

「慧汰の弱点は英語と保健体育だ、そうなら皆で助けてやってくれ」

日本人なのに何で英語が必要なのか分からない、保健体育に関しては全く出来ないムツツリーニは何で出来るんだ？

『彼女は俺が守……』

『馬鹿野郎!! お前より俺のほうが点数が高い! だから俺が守る!』

『まあ皆落ちて着け、ここは俺が責任をもって守ろうじゃないか』
どうして男に護られなきゃいけないんだ、このクラスに性別は関係ないのか？

そろそろ暴動が起こりそうだから、銃器型スタンガン（20万ボルト）を一齐に撃ちだし、痺れさせて黙らせる

「どうして慧汰はそんな物持ってるの？」

「護身用だ」

「そうなんだ……がんばってね」

今の明久の言葉に色々含みがある気がするんだが、気のせいかな？

「当然俺も全力をつくす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、実力はAクラスレベルが3人も居るってことかよ？
もしかしたら、やれるんじゃないか？』

なんだかんだでクラスのやる気が良い方向に向かっているようだ

「それに吉井明久だっている」

………クラスが凍りついた、そこだけ時間が止まったように

「ちよつと雄二！どうしてそこで自分の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要ないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

さっきの自己紹介であそこまで不愉快な大合唱しておいてそれを言うか

「ホラ！折角上がりかけた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間だから、ってなんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

『…それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違うよちよつとお茶目な」

「そつだ、馬鹿の代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二いい！！」

「あの、それってどういうものなんですか？」

流石実力は学年次席の姫路、この単語は聞いたことが無いようだ

「具体的には教師の雑用、主に力仕事そのおかげで物に触れる召喚獣が使える」

とりあえず説明を言っておく

「そうなんですか？そんなことができるなら便利ですよね」

「あはは、そんな大したものじゃないんだよ」

手を振って否定する明久、まあ先生の監視下じゃないと駄目なんだから不便だろう

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ』

『だよな。それならおいそれと召喚できない奴が一人いるってことになるな』

確かに、痛みがフィードバックされるんだから頻繁に使えない

(明久)

とりあえずアイコンタクトで釘を打っておこう

(何？慧汰？)

(戦闘にはしっかり参加しろ)

(やだなあゝしっかりと出るよ)

凶星を突かれたのか目が泳いでいる

(参加しなかったら島田にお前が変な噂を流していると言っておくからな)

(え?)

そこでアイコンタクトを止める、必死に明久が何か訴えてくるが無視しよう

「気にするな。どうせいてもいなくても同じような雑魚だ」

「雑魚を気にする必要は無い」

「二人とも、そこは僕をフォローする」

「とにかくだ。俺達の力を証明として、まずはDクラスを征服を試みようと思う」

「すごい大胆に無視された!」

「皆、この境遇は大いに不満だろう?」

『当然だ!』

「ならば全員武器（ペ）を執れ!出陣の準備だ!」

『おおー!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない!Aクラスのシステムデスクだ」

雄二、今卓袱台バカにしなかったか？

『うおおー！！』

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告ってたいてい酷い目に遭うよね？」

そりゃクラスが決まった当日に、向こうからしたら舐められていると思うからしょうがない

「大丈夫だろ、あいつらが明久に危害は加えないだろうし、騙されたと行って行ってみたらどうだ？」

とりあえず、明久が行くように仕向ける、めんどくさいのは明久にやらせるのが一番だ

「慧汰、本当に？」

「俺を疑っているのか？」

「もちろん」

「お前との友情にヒビが入ったのを感じるな」

「慧汰には一年の時いろいとやられたからね」

一年の時は特に何もしてない

腕の関節外したり、首筋に斜め45度でチョップ入れて気絶させたり、目潰しをしたり面倒くさいことは明久にやらしたただけだ

「なるほど、じゃあ一年の時のようにするか？」

「わかったよ、使者は僕がやる」

言葉を180度変えて案外素直に受け入れてくれた

「頑張れよ」

「うん」

そして明久はDクラスに向かっていった

「やっぱりいいいい！！！！」

「だろっな」

必死に廊下を走って教室に転がり込む明久

それにしても制服まで破られるのか、やはり明久に頼んでよかったな

「まあ、そうだろっな」

「そうだろうなってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想どおりじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

「雄二、表面上だけでも謝っとけよ」

「慧汰もだよ！！むしろ表面上だけだと謝らない方がいいよ！！」

「明久、悪かった」

雄二は本当に口調だけの謝罪をした、目つきは物凄く睨んでいる

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん大丈夫。ほとんどがかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

心配する姫路と島田が明久に詰め寄ってくる

おい後ろの男子嫉妬の目で見てやるな、おぞましい空気がダダ漏れだ

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……ウチが殴る余地がまだあるんだ……」

本当に危険な趣味だな、相手が明久だけで良かった

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

腕を押さえて転げ回ってる明久、

「こんな傷大丈夫だろう」

明久が怪我をしているところを軽く蹴る

「痛い！！」

「平気って言ってなかったっけ？」

「傷口に砂糖を塗るような事されたら痛いよ！！」

「塩だバカ」

つくづく思うのだが本当に明久は本心で言っているのだろうか？

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

雄二はそう言って教室を出た、どうやら他の場所でするようだ

「あの、痛かったら言って下さいね？」

「大変じゃったの」

「お疲れ」

「応ねぎらいの言葉をかけておく

「元はと言えば慧汰があんなこと言うから!!」

「最終的に行くと言ったのはお前だろ?」

「そ、そうだけど」

これで黙ってくれたみたいだ

「……………（サスサス）」

頬を擦るムツツリーニ

「ムツツリーニ。覗いていた時の畳の跡ならもう消えているよ?」

「……………!!（ブンブン）」

否定する必要がないのに全力で否定するムツツリーニ

「諦めろ、ムツツリーニが欲望に忠実な変態なのは周知の事実だ」

「……………!!（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定するのか・・・」

「何色だった?」

不意に明久が質問を投げかける

「みずいろ」

即答か

「さすがムツツリーニ」

「やっぱりムツツリーニは色々な意味で凄いよ」

「……………！！（ブンブン）」

「ほら吉井、アンタも来るの」

島田が明久の腕を引っ張る、

……………男子達、特に須川どこからそんな量のカッターを取り出した？

「あー、はいはい」

「返事は一回！」

「へーい」

「……………一度、Das Brechen ええと、日本語だと…」

島田さんは帰国子女で前はドイツに住んでいたらしいから多分ドイツ語だろう、日本語以外は興味が無いから覚えていない

「……………調教」

さすがムツツリーニ

「そう、調教の必要がありそうね」

「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない」

「じゃあ、教育的指導という名目で調教は大丈夫か」

「やだよ！」

そういう他愛のない話をしながら屋上に向かうメンバー

問4 バカとクラスと暴力騒動(未遂)(後書き)

- ・ もつすぐ戦争ですね、主人公が空気にならなければいいのですが・
- ・ 誤字脱字の連絡、アドバイスや感想などお待ちしております

問5 お昼と約束と作戦会議(前書き)

PV6000HIT、ユニークアクセス1000HITありがとうございます
ございます!!

こんな辺境の小説を読みにいただいて本当に感謝しております

問5 お昼と約束と作戦会議

問

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい
光は波であつて（ ）である

姫路瑞希の答え
粒子

教師のコメント
よく出来ました

菊井慧汰の答え

光とは基本的に、人間の視覚を刺激して明るさを感じさせるもの
こと。すなわち可視光線のことである。だが現代では自然科学の分
野では「光」は電磁波の一種と説明されており、同分野では「光」
という言葉で赤外線・紫外線（不可視光線）まで含めて指している
ことも多い。

さらに光は宗教や、哲学、自然科学、物理などの考察の対象にもな
っている

自然科学としては光は波動と粒子の二重性を持ち、波動であること
を強調する場合は光波、粒子であることを強調する場合は光子と呼
ばれている

教師のコメント

何故そこまで知っているんですか

土屋康太の答え
寄せては返すの

教師のコメント
君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます

吉井明久の答え
勇者の武器

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

屋上に着き雄二は俺達を見ながら言った

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」
「ずいぶん急だな、別にいいが」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

各々地面に座る、…やはり地面に座るのはあまり好きではないな、座るのはやはり畳だ

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物食べるよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

やはり今日もまともな物は持ってきてないのか、これは戦争では支障が出るな・・・

「明久、ほら」

明久が振り返ってきたのを確認しておにぎりを一つ渡す

「え？いいの？」

嬉しそうにお握りにがつつく明久

「どうせロクに持ってきてきてないだろ？」

「うん……」

すっかり凹む明久

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べてるよ」

「……あれは食べていると言えるのか？」

雄二の言うとおり、明久の主食は水と塩・・・泣けてくるな、後で何か奢るか

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って 水と塩だろう？」

雄二が哀れむように言う

「きちんと砂糖だって食べているさ」

「おい明久、塩と砂糖は調味料だ。食べると言わない」

「舐める、が表現として正解じゃろっな」

塩と砂糖と水だけで生きている明久が惨めに思えてくる

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「ゲームに小説に漫画に……生活は大丈夫か？」

「大丈夫！水も電気もちゃんと出てるから」

周りの空気が凍りついた

「……どうして皆そんなに哀れむような目でみるの？」

「吉井、本当に生きていけるの？」

「お湯はちゃんとでるか？」

「いや、出てないよ？」

「……何を当たり前みたいに言ってるんだコイツは」

「え？雄二、僕の家じゃ普通だよ？」

どう考えても普通じゃない

「ちゃんと、家賃払えよ」

「仕送りが少ないんだよ！！」

「充分すぎるほど貰ってるだろ！？」

小説にゲームに漫画を何冊も買えるほど貰っているのに少ないというのかこいつは……

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？」

突然思い立ったように姫路が言う

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のもの食べるなんて久しぶりだよー」

よく今まで生きていたなコイツ

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「良かったな明久」

「うん！」

本当に嬉しかったのか雄二と俺のからかいの言葉すら素直に受け入れている

「……ふーん。瑞希ってずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

すごい棘のある言い方だな、そんなに姫路が明久に弁当を作るのがつまらなかったのか

自分も明久に作ればいいのに

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……お手並み拝見ね」

「他人の料理か……興味が湧くな」

基本自分で作るのだから他の人がどんな味付けするのか興味がある、結構参考になるしな

「わかりました。それじゃ、皆に作ってきますね」

「姫路さんって優しいね」

心の底からそう思っているらしいのだが、すごい姫路と明久の周りの空気が色がピンクだぞ

クラスの男子が見たらまずカッター向けられるな

「そ、そんな……」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君が」

何を思ったのかいきなり告白しようとする明久

「おい明久、今振られると弁当の話はなくなるぞ？」

「にしたいと思っていました」

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」

「馬鹿と天才は紙一重と言うが、明久の場合はそんな事なかったか」

「だって……お弁当が……」

そんなに欲しいのか、カロリーー

「さて、話がかかり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

話しが逸れたのは明久のせいだ

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

確かに秀吉の言うとおりだが、雄二はFクラスにはいるが昔神童とまで呼ばれていたほどに頭の回転が速い、何か策でもあるのだろうか

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

無策で突っ込むのはただの無謀だ

「どんな考えですか？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

「どんぐりの背比べくらいだな」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「えーつと……」

俺も周りを見わたしてみる、美少女が三人（姫路、島田、秀吉）に馬鹿（明久）元神童（雄二）と変態（ムツツリーニ）がいるな

「美少女三人と馬鹿が二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええ!？雄二が美少女に反応するの!？」

訂正、元神童（雄二）ではなく馬鹿（雄二）にしよう

「……………（ポツ）」

「ムツツリーニまで!?!どうしよう、僕だけじゃツツコミきれない」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ」

美少女の……いや、美少年の秀吉がなだめる

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミ入れたい

んだけど」

「ま、要するにだ」

もったいつけるように咳払いをする雄二

「姫路が問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

明久、負けたら三ヶ月試召戦争できないぞ？

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけしたいだろ？それに、さっき言いかけた打倒Aクラスに必要なプロセスだしな」

「あ、あの！」

大人しい姫路なんには珍しい大声

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「あと慧汰もだ、それはついさつき、姫路の為に明久に相談」「それはそうとー!」「」

明久は大きな声を出して雄二の言葉を遮る

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味無いよ」

「別に大丈夫だろう」

「何で?」

「このクラスは最強だろ?」

そう思わないとやっていけないという自己暗示もかねて言う

「そのとおり、お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

「いいわね。面白そうじゃない!」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………(グッ)」

「が、頑張ります」

皆のモチベーションが上がったようだ、このままやる気を落とさなければいいが……

まあ大丈夫だろう

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

問5 お昼と約束と作戦会議（後書き）

会話が多すぎて酷いことに……

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想（くれるとキモヲタが泣いて喜
びます）お願いします

問6 初めての戦争と召喚獣と腕輪能力(前書き)

どうも誤字脱字に定評のあるキモヲタです

この戦争が終わりましたら一身上の都合により更新を二日に一度から三日、四日に一度の更新ペースになってしまいます、申し訳ありません

問6 初めての戦争と召喚獣と腕輪能力

問

ベンゼンの化学式を答えなさい

姫路瑞希の答え

C6H6

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え

ベン+ゼン=ベンゼン

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか

吉井明久の答え

B - E - N - Z - E - N

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るよつに

菊井慧汰の答え

炭素6 水素6

教師のコメント

英語が嫌いなのは知っていますが、ちゃんと化学式を書いてください

試召戦争が始まり、先攻部隊に配属された秀吉と俺はさっそく交戦状態に入った

ちなみに俺は言った覚えもないのに部隊長になっている

雄二いわく

「お前が指示を出すと皆やる気が出る」

とのことだ

「さすがに、疲れるのう」

「俺は戦ってないから大丈夫……少し前に行くか」

前に歩いていき、戦争の最前線に来た

Fクラスはまだやられている奴はいないが押され気味だった

「向井先生！！Dクラスの中井健人なかいけんが召喚を行います、試獣サモン召喚」

どうやら俺に古典で勝負を挑んできたようだ

「サモン試獣召喚」

向こうは剣を片手に騎士のような鎧を着ている

俺の召喚獣は黒の和服（男性用）に草履をはいていて、刀を持った身長80cmくらいのデフォルメの自分

召喚が終わるとともに一気に相手の召喚獣に向かって走り、刀を体に突き刺した

そして徐々に点数が出てくる

Fクラス菊井慧汰

古典 462点

「よ……400点越えだど!？」

そりゃ驚くだろうFクラスに400点越える奴がいるのだから、確かムツツリーニも保健体育で500越えているはずだが

「さあ来い!この負け犬が!」

どこから現れたのか中井の後ろから鉄人が出てきた

「て、鉄人!?嫌だ!補習室は嫌なんだっ!」

「黙れ!捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ!終

戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」
中井、頑張れ

「拷問？そんなことはない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬する人は二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げよう」

それはもはや洗脳に近い気がするんだが……

「お、鬼だ！誰か、助け イヤアア (ボタン、ガチャ)」

……合掌

さっきの中井との一戦で俺に向かってくる人がいなくなった

今現在はほとんどが文系の先生だということもあるのだろう

「く、これはやばいのう」

遠くで点数がギリギリの秀吉が戦っていた、かなり点数が削られているようで疲れきっているのが見える

「秀吉！ サモン 試獣召喚」

この距離では刀が届かない、秀吉の戦闘中の教科は歴史……Dクラ
スで使いたくなかったが、腕輪能力を使うとするか

腕輪能力それは教科点数が400を越えた人にも使える能力、人

によって能力は変わるがどれも使うと強力だ

「身変わり」

「何!？」

敵が驚いた理由は秀吉のところにはたはすの召喚獣と俺の召喚獣の位置が変わっていたからだ

未だに驚いている敵に武器を弾き、横一線に切る

「戦死者は補習!!」

「嫌だ、あああああ（ボタン、ガチャ）」

また一人補習室に連れて行かれた……悲しいがこれが戦争か

「五十嵐先生、Dクラス横山総よこしまぞうが召喚をします、試獣召喚」

「五十嵐先生、Dクラス伊藤楓いとうかえでも続いて召喚します、試獣召喚」

教科を変えて、武器が手から離れているとき三対一で潰しに来たか、文系以外は出来ないと考えたのだろう……まあ化学は苦手だが

Dクラス横山総 & 伊藤楓 VS Fクラス菊井慧汰

化学 81 & 94 VS 231

一斉にDクラスの奴らが攻撃を仕掛けてくる

俺の召喚獣は着物の中に手を入れて、小回りの利く懐刀を取り出す

「「え？」」

今度は二人連続で切り伏せる

「戦死者は補習！！」

「何であんな奴がFクラスにいるんだよ！！」

「補習室は嫌ああ！！！！」

「まさか彼女が噂の菊井だったとは……」

最後にすごく気になる言葉が聞こえたが、多分空耳だろう

「すまんのう慧汰」

「いや大丈夫だ……秀吉、前線を後退させる皆結構削られている」

「うむ、承知した」

そう言つて秀吉は大きな声で指示を出した、美少女からの号令ということもあつてか皆やる気を出していた、さすがは秀吉と言つたところか

「皆！仲間を庇いながら戦え！誰一人として戦死者は出すな！！！！」

『おっ！』

俺の号令にもしっかりと聞いてくれているようだ

「遠藤先生、小寺亮が召喚します、試獣召喚」

「しまった!!」

完全に油断していた、知らないうちに英語科の先生が来ていたようだ

Dクラス 小寺亮 VS 菊井慧汰
英語 84 VS 3

「菊井、お前は俺が守る!! 試獣召喚」

「いや、俺が守る!! 試獣召喚」

こいつらは確か同じクラスの田中と武藤

二人の援護のおかげで小寺の点数が0になる

「悪いな」

「どうってことない」

武藤がスツと手を差し伸べてくれたのでその手を掴み

「言っただろう? お前は俺が守るって」

その台詞は何で俺に言う必要がある?

このクラスは本当に性別は関係ないのか?

「全員突撃しろっ!」

後ろの方から明久の声が聞こえてくる、しかし何故だ皆後ろに行けないような、行ったら命が無いようなそんな必死さが伺える

「明久、援護に来てくれたんじゃない！」

「悪い、助かる」

ここで中堅部隊が来ると思わなかったが、これで結構前線が楽になる

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。さつき慧汰が助けてくれたおかげで戦死は免れておる。じやが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

「そうなの？召喚獣の様子は？」

「もうかなりへろへろじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

確かにアレだけ消費したのだから無理だろう

「そっか。なら早く戻ってテストを受け直してこないと」

「そうじゃな。全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一、二教科でも受けてくるとしよう」

そう言って、秀吉は急いで教室に向かっていった

「慧汰は大丈夫なの？」

「まだまだピンピンしているから大丈夫だ」

「そっか」

「明久、ルールは覚えているか？その教科の教師がいないと召喚できないからな」

「わかってるよ！」

そう、この試召戦争にはいくつかのルールがある
たびたび改定などされるし他にも細かいルールがあるが、説明する
のが面倒なので割愛させてもらおう

「吉井、菊井、見て！」

島田が何か叫んでいる

「布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」
先生を増やして一気にケリをつける気が、だが俺としては願ったり
叶ったりの状況

「島田、化学に自身はあるか？」

「全くなし。60点台常連よ」

「そっか、だったら俺が囿になるから明久と一緒に布施先生に近付
かないよう注意しながら学年主任のところに行け」

「高橋先生のところね？了解」

「慧汰、ありがとう」

そう言いながら自立たないように移動していく明久と島田

俺は一気布施先生のところに走って、戦闘するようにする

「布施先生召喚をします、試獣召喚」

「クソツ！！誰か援護を頼む」

数人援護に来たが一気に斬る

「戦死者は補習！！」

さて、もう少し前に出て楽させるか

「死になさい、吉井明久！！試獣召サモ」

「誰か！島田さんが錯乱した！本陣に連行してくれ！」

島田が何故発狂しているのかは触れないでおこう

「慧汰助けて！！って何で全力で逃げるように走っていくの！？」

俺も長生きしたいんだ

前線へ向かうと敵がお迎えしてくれていた

「君が菊井か……確かに頭は良いようだけど、これだけ人数が多ければどうかな？」

近くの先生が数学だが俺一人に対して6人注ぎ込んできたということとは、Dクラスの皆は姫路がFクラスにいることを知らないのだから、これを使わない手はないな

「人海戦術かAクラスBクラスならそつちの方が良いかもしれないが、どうせならもつと寄越して来たほうがいいんじゃないか？……試験獣召喚」

あの数学の先生は採点の速さと厳しさに木内先生、これは後で報告しに行った方がいいな、木内先生が敵の補充テストの採点をしたらかなり危険だ

Dクラスすすもとじゅん まつだけいち鈴本純&松田圭一 & かわだみなみ川田南 & うえむらりょう上村良 & わたなへけいすけ渡辺慶介 & まついだいき松井大樹

VS 菊井慧汰
数学 1 1 6 & 6 5 & 9 7 & 8 3 & 7
5 & 1 0 3 VS 2 8 4

「補習室送りになりたい奴からかかってこい」

後で姫路が動きやすいように、派手に暴れてFクラスで一番強いのは俺という印象を植え付けさせる

「菊井さん覚悟！！」

前田の召喚獣の攻撃をバックステップでかわして着地と同時に前に踏み込み横一線で斬る

まず一人

この人口密度に刀は少々使い難い、敵に向かって刀を投げる

「狙いが甘いぞ!!」

その刀は誰にも当たらず飛んでいく

「何を言っている？刀は咄だ」

刀に注意が逸れた松井の召喚獣に接近して懐刀で斬る、これで二人目

「もらったああ！」

「はあ!!」

前後から挟み込むように攻撃を仕掛けてくる上村と渡辺

上村の攻撃を受け流す

「くらえ！」

後ろから渡辺が肉薄する

後ろに逸れた上村の召喚獣の袖を掴み後ろの攻撃の延長線上に添え、盾の変わりにする

「何だと!？」

しっかりと上村の召喚獣に攻撃をした渡辺の召喚獣、剣が上村の召喚獣に刺さっている間に上村もろとも懐刀を捻じ込むこれで四人

少々疲れが出てきたか

「慧汰！大丈夫！？」

後ろから急いで駆けつけてきた明久とクラスメイト達バカ

「皆！慧汰がここまで頑張ってくれたんだ！！この前線から一步も進ませないように維持するんだ！」

明久の号令で士気が上がり、残りの二人の召喚獣を（数の暴力で）倒した

「戦死者は補習！！」

本当にどこでもいるな、鉄人

「悪いな明久、ちょっと報告と補給してくる」

「わかった」

急いでFクラスに戻る

教室の扉を開けると補給しているクラスメイトがいる

いまだ少し怒っている島田に、姫路、秀吉、雄二を見つけてさっきのことを報告する

「どうした慧汰、お前ならまだ大丈夫だろう」

「ちょっと補給ついでに報告をしにきた」

「報告？」

「木内先生がDクラスに呼び出されていた、一気に攻め落とすつもりだろうな」

「なるほど…、おい！今手が空いている奴は世界史の田中を呼んで来い！」

「はい！」

クラスメイトの一人が雄二の命令を聞くとすぐさま職員室に向かって走っていった

Dクラスと逆を取る……これが吉と出るか凶と出るか

とりあえず数学の補給テスト用紙をとる、先の戦いで案外削られたからな

カリカリカリカリカリカリカリカリカリ

こんなもんだろう

「坂本隊長！」

いきなりドアを開く

「どつした須川？」

「吉井隊長が先生達に偽の情報を流したいと」

「時間稼ぎか……先生の中で簡単に引っかかりそうでいつまでもい
そうな奴は……」

「雄二、船越先生はどうだ？」

船越先生（45歳 独身）担当数学、婚期を完全に逃して単位を使
い生徒に交際をせまるようになった先生としてどうかと思う人

「なるほど……須川！放送室に行つて船越先生に明久が体育館裏で
生徒と教師の垣根を越えた話があると放送してこい！」

「はい！！！」

全力で笑顔で廊下を駆け出す須川、……本当に愉しそうに走ってい
るな……

「これで大丈夫だろう、慧汰もよくあの先生を思い出したな」

「雄二こそあそこまで非道な放送を指示したんだから変わらないだ
ろっ」

「二人とも鬼じゃな」

「どこかだ？」

雄二と声が八モる

「坂本君、あの……吉井君が船越先生を体育館裏で待つというのは
？」

「坂本、吉井が船越先生を体育館裏で待つってどういうこと?」

あれ何故だろう、いつも大人しいはずの姫路とかなり危険で今にも教室を飛び出して明久を殴り殺そうとしている島田の後ろに真っ黒なオーラが見える

明久、愛されているな

「アレは嘘だ、安心しろ」

すぐにフォローに入る雄二

「そうですか、よかったです……」

「そう、ならよかった」

ピンポンパンポーン

《連絡致します》

丁度放送が入ったようだ

《船越先生、船越先生》

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

ダメだ、分かっているても笑い転げそうだ、雄二に至ってはもう我慢が出来ない様子

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

さらにさっきのより脚色されていた

どうしても笑ってしまう、腹筋が痛い、雄二に至っては大きな声で笑い転げている

これで皆の士気が上がればいいが

「須川ああああああ！！」

遠くから明久の絶叫が聞こえる

問6 初めての戦争と召喚獣と腕輪能力（後書き）

今思うと主人公の腕輪能力が酷い性能・・・

ちなみに彼は文系最強、英語保健体育最弱っていう設定です
でも後々オリキャラの設定も入るので詳しくはそこで

誤字脱字の連絡、アドバイス感想などよろしくお願いします

問7 怨みと怒りと戦争終結

問題

以下の問いに答えなさい

goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい

姫路瑞希の答え

good ? better ? best
bad ? worse ? worst

教師のコメント

正解です

吉井明久答え

good ? gooder ? goodest

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。Goodやbadの比較級と最上級は語尾に-erや-estを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え

『 bad ? butter ? bust 』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

菊井慧汰の答え

比較級と最上級を教えてください

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように

「さて、そろそろ援軍を出すか」

「そうか、わかった」

そしてゾロゾロと教室を出て前線に向かう、それなりに報告は来たが結構押されているな

明久を入れて1、2、3、4、5人が結構危なかったようだ

「明久、あと少し持ちこたえろ！！」

隣に居る雄二から激が飛ぶ

「慧汰、前線に突っ込め」

「わかった」

走りだして前線に向かう

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚を行います！」

「負けるか！」「Fクラス菊井も行きます」 菊井！

田中が召喚する前に割り込む

Dクラス 鈴木一郎 VS Fクラス 菊井慧汰

化学 92 VS 216

向こうも刀を使うらしいがまだ攻撃が雑だ

懐刀を出してさらに踏み込む

「リーチの短いそれは踏み込ませなければいいだけだ！」

確かに普通の懐刀ならそうだろう、でもこの懐刀は違う

「悪いな」

いつもと同じように斬る、その手には普通の刀と同じ長さの懐刀があった

「何だと!？」

この懐刀は面白い、いつもは普通の懐刀だが警棒と同じように伸ばして普通の刀として使うことが出来る、ただ形がちょっとおかしいが

「戦死者は補習！！！」

本当によく仕事する奴だ鉄人は

「先生、Dクラス笹島圭吾行きます！試験召喚」

狙いは明久か、反応が遅れて割りこめない

「吉井明久！その首級貰った！」

「負けてたまるかああ！」

いつになくやる気を見せる明久、そんなに補習室送りは嫌か

「試験召喚」

明久が叫び足元に魔方陣が顕れる

現れたのは学ランに木刀を持ったデフォルメ明久

「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。貴公の相手を あがあ！」

肩を思いっきり刺されて痛みがフィードバックしたのだろう

「この部隊長はバカだ！俺一人で十分だから、皆は残りを」

思いっきり雑魚扱いされているな、合っているからフォロー出来ない
いが

「菊井！覚悟！！」

こっちはこっちでめんどくさい事になりそうだ

「ああっ！霧島さんのスカートが捲れている！」

不意に交戦中の明久から声が聞こえる

『なにい！？』

学年主席の才色兼備の霧島翔子、男が見るのは分かるが女子が見るのはどうかと思うぞ

だが明久の叫び声のおかげで注意が後ろに逸れた隙に倒す

「卑怯だぞ！？」

「卑怯も何も戦っている最中で目を逸らすお前が悪い」

これは正論だと思っただが……

「戦死者は補習！」

争いの後はいつも虚しい……

ガシャアアン！！と派手な破砕音とともに窓が割れる

『な、なんだ！？何事だ！？』

「うわっ！島田さん！そんな物どうする気だよ！」

ブシャアアツ！景気よく溢れ出る消毒薬の粉末

「う、うわ！なんだ!？」

「ぺっぺ！こりゃ消火器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

視界が消化器の粉のせいで遮られ戦闘が続けられない状態になる

「島田さん、キミはなんてことを！」

三文芝居なのだが、実際に島田がやりそうだから困る

「Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな
！」

「そつだ！在学中には彼氏のできない状況にしてやる！」

後で島田に言つとくか

「…………でも、男らしくしてステキ…………。お姉さま…………」

この学校百合多すぎじゃないか？

「だあああ！」

また明久の叫び声が聞こえる、今度はスプリンクラーを壊したのか
スプリンクラーが作動して水滴が粉を落とす

「待たせたな、吉井！五十嵐先生！Fクラス、こんだつよしむね近藤吉宗が行きます
！」

「試獣召喚！」

Dクラス	中野健太	V S	Fクラス	近藤吉宗
化学	4 3	V S		9 1

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

敵部隊長の塚本が撤退命令を出した、が遅い

「試獣召喚」

一人は確実に殺っておこう、悪いな中野

「ちょっと、待　　」

「戦死者は補習！」

「慧汰、深追いはするな。俺達も明久の部隊を回収したら一旦戻る
ぞ」

もう少し追って敵の数を減らしたかったが、代表の命令逆らうまい

「さて、無事なようだな。明久」

「明久が補習室に行くのを待つていたが……期待ハズレだ」

「慧汰は何を期待しているの！？もっと無事だったことに安心してよ！」

そして部隊を立て直すため戦場に背を向けた

教室に戻り明久が化学のテストを受け直して

「明久、よくやった」

雄二は珍しいくらいに笑顔だった

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッチリな」

「当たり前だろう」

アレは爆笑ものだった、思い出しただけでも腹筋が壊れそうだ

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

明久、その包丁どっから持ってきた？

「やれる、僕なら殺れる……！」

「殺るなつての」

「明久、殺すときは避けにくく致命傷になりやすい肝臓を狙うのがいいちなみにこの角度からだど死角になる」

「慧汰、ありがとう」

「物騒なことを教えるなよ……ちなみに、あの放送を指示したのは俺だ」

「シヤアアアア！」

人の恨みは怖いな、さっき言ったことを完璧にモノにしている

「だが原案を出したのは慧汰だ」

そして方向を変えて俺に攻撃を向けてくる明久、難なくかわして地獄突きを一発

「ぎゃああああああ」

明久の断末魔が教室に響く、気道を突かれたから過呼吸気味だ

「慧汰、よくも！」

「攻撃を教えているのに対処法を知らないわけがないだろう」

「あ、船越先生」

雄二の言葉で凄い勢いで卓袱台を蹴散らしながら逃げる明久

卓袱台を蹴るとは…今すぐに殺したいところだが今は戦争優先だ、明久を殺すのは後にしよう

だがやはり抑えられないので明久に向って走り思いっきり横っ腹に回し蹴りを一発入れる

「ぐふあ！」

その勢いで頭から掃除用具入れに顔からぶつかる

俺を睨みながら明久の顔の型がついた掃除用具入れに入る明久

「明久、次もう一回卓袱台蹴散らしたらコレ使うから」

取り出したのはスタンガン（50万ボルト）

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着つけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じゃろっ」

「……………（コクコク）」

「まだまだ、戦いたいのだが…しょうがないか」

「おっしや！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ」

『おう!』

そして明久バカをおいて教室を出る

「なあ明久」

とりあえず船越先生の事を言っておこう

身の危険は無いと安心させるためにも

「船越先生が来たのは嘘だ、安心しろ」

そう言い残して教室を後にする

「逃がすか、慧汰ああ!」

五月蠅い奴だ、下校している生徒に紛れ込んで明久から逃げる

「下校している連中につまぐ溶け込め!取り囲んで多対一の状況を作るんだ!」

雄二の指示が聞こえる

「そつちから回り込め!俺はコイツに数学勝負を申し込む!」

「なら、俺は古典勝負を」

「日本史で」

しっかりDクラスを取り囲んでいるようだ

『Dクラス塚本、討ち取ったり!』

大きな歓声が聞こえる、結構手こずったのだろう

「慧汰、どこだ!」

まだあのバカは俺を殺したいらしい

「慧汰、首を洗って」

そつとスタンガンを構えて明久を迎え撃つとしよう、まさかこの手で仲間の始末をするとはな、少し辛い気持ちもあるがしょうがないか

「援護に来たぞ!もう大丈夫だ!皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け!」

この声はDクラス代表の平賀か

「Dクラスの本隊だ!ついに動き出したぞ!」

この戦争も佳境に入ったようだ

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け!他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ!」

『おおー!』

平賀の号令で雄二の周りにDクラスメンバーが囲う

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人ごみに紛れて攪乱かくらんするんだ！」

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けない！追い詰めて討ち取るんだ！」

雄二の号令と、それを聞いてすぐに指示を出す平賀

「チャンス！」

不意に離れたところから明久の声が聞こえた

「向井先生！Fクラス吉井が」

「Dクラス玉野美紀たまのみき、試獣召喚」

「なっ！近衛部隊！？」

当たり前だろう、大将を一人にするはずがないだろ

「残念だったな、船越先生の彼氏クン？」

勝ち誇った顔をする平賀

「ち、ちがう！アレは雄二と慧汰が勝手に」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん、彼に祝福を」

奇襲の準備をするか、相手は平賀ではなく近衛部隊、数えるとざつと7人はいる

「わかりました」

「ちくしょう！あと一步でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

「何を言うかと思えば、彼氏くん。いくら防御が薄く見えても、さすがにFクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？」

一気に人ごみをかわして近衛部隊に近づく

「試獣召喚」

「え？」

奇襲が成功して玉野の召喚獣の点数が0になる、さらに他の近衛部隊も倒していく

残り4人、代表を仕留めるにはこの近衛部隊を倒さなければならぬいし、その間に代表が逃げられる

「この戦争の幕引きはあいつに任せよう」

「姫路きん、あとは頼む（よろしく）」

「は？」

平賀が硬直する、思考がついていけないような感じだ

「あ、あの……」

「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど」

まだ姫路がAクラスだと思い込んでいるらしい

「いえ、そうじゃなくて……Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしく願います」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「あの、えっと……さ、試獣召喚です」

Fクラス	姫路瑞希	VS	Dクラス	平賀源二 ^{げんじ}
現代国語	339	VS		129点

「え？あ、あれ？」

姫路の召喚獣は召喚獣の背丈の倍はある大きな剣

「じ、ごめんなさい」

大きな剣を持っているとは思えないほどの速さで一気に接近する姫路の召喚獣

相手は戸惑っていたからか反撃もできず一撃で下す、それはこの戦

争の決着の瞬間だった

問7 怨みと怒りと戦争終結（後書き）

前の問にも載せましたが掲載期間が2日に一回から、3、4日に一度になります

本当に申し訳ありません

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想などよろしくお願いします

問8 交渉と暴力と戦争後（前書き）

サブタイトルに良いのが思いつかないです・・・

問8 交渉と暴力と戦争後

問

以下の問いに答えなさい

女性は（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める

姫路瑞希の答え

初潮

教師のコメント

正解です

土屋康太の答え

初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される

教師のコメント

詳しくすぎです

吉井明久の答え

明日

教師のコメント

随分と急な話ですね

菊井慧汰の答え

教師のコメント

何故答えを書いたのに何度も消しゴムで消した跡があるんですか？

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおー！』

その報せを聞いたFクラスは喜びの咆哮が校舎を駆け抜けていった

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二さまさまだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

クラスの皆は雄二を称えて雄二の周りはお祭り騒ぎ、本当に嬉しいのだろう

「姫路さん愛しています！」

またお前か

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか」

やはり褒められて照れているのだろう、少しニヤけた顔で頬を掻きながら明後日の方向を見ている

「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

Dクラス代表との話し合いが知りたいから雄二の方に向かうとするか

「慧汰！」

「どうした？明久？」

「握手しようー！」

こいつ絶対に何か企んでいるな、笑顔が黒い

「握手なら大将の雄二とすればいいだろう」

「いやいや雄二よりも先に、この戦争で一番がんばった慧汰に握手がしたいんだ」

ゆっくり手を突き出してくる明久

「そうか」

俺もゆっくりと手を出して……体重を乗せて決るように片目潰しをする、目が見えないのは辛いからな

「ぎゃあああ！目が！！大事な片目があああああ！！」

悶え苦しむ明久が落とした包丁を取る

「慧汰…、どうして握手するのに目潰しされるの？」

「こんな物騒なもの持っていたら当たり前だろ？」

拾った包丁を明久の方に見せる

「……………」

二人の間に音がなくなる

「慧汰、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね。僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らなかったよ」

「遺言はそれだけか？」

「何で！？仲間との団結が素晴らしいと言ってるだけじゃないか！
！」

必死に自分を弁護する明久、哀れだ

「その仲間には包丁を向け、殺そうとしていたが？」

「そつちだつて仲間を危険な場所に放り込んだじゃないか！」

「お前も仲間の島田に悪い噂がつくような事したよな？そんな奴に仲間がどうこう言われたくないな」

笑顔で返答する、そしてそつと包丁を明久の方に向けて

「ちょ、ちよつと！ストップ！僕が悪かった！」

「分かればいい。それとこれは返すぞ、もうやるなよ」

持っていた包丁を明久に返すそして、明久を背にして雄二の方へに向かう

「もらったあ！」

やっぱりバカだ、後ろからの明久の攻撃を受け流して

「これは正当防衛になるからいくら殴っても大丈夫か、さっきの卓袱台を蹴った分もあるしな」

「え？それって過剰防衛」

「恨みからは何も生まれない」

誰に言うわけでもなく独り言呟いてボロボロになった明久を背に雄二の方に歩いていく
ちよつど話し合いの最中のようだ

「ルールに則ってクラスは明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で言いか？」

Dクラス代表の平賀は潔いさがいいな、明久もこれくらいになってほしいものだが…多分無理だろう

「いや、その必要は無い」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

これはDクラスにとって願ってもいないことだろう

「もちろん、条件がある」

「……」応聞かせてもらおうか

「なに、そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら窓の外

にあるアレを動かなくしてもらいたい」

雄二が指を刺したのは

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれている可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろ？」

雄二の出したのは破格の条件だった、うまくやれば嚴重注意で済むのだから

「それはこちらとしては願ってもいない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか。ではこちらは有難くその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」

「ああ、ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「はは。無理するなよ。勝てっこないと思っっているだろう？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

そして、手を振りながら去っていった平賀

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補習を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ」

雄二が号令をかけるとFクラスの皆が教室へと向かう、さて俺も教室に戻る前に倒れている明久を起こすとしよう、廊下に生ゴミがあると通行の邪魔だからな

「起きろ」

脇腹を蹴って起こす

「ぐはあ！…誰だ！？安らかに寝ている時に乱暴に起こすのは！？」

「……それは死んでないか？だがまだ余裕がありそうだな、次からは船越先生を呼ぶことにしよう」

腕の間接を外して、顔面を数発殴って、鳩尾を蹴って、金的するだけでは足りないようだ

やはり今は明久が一番辛い船越先生を呼ぶことが一番効果的だろう

「ごめんなさい……」

すぐに土下座をする明久、やはり今一番怖いのは船越先生のようにな

「あれ？皆は？」

「皆、教室に戻るところだ」

「そう、僕らも帰ろうか」

少し歩くと雄二と姫路が一緒に何処かへ歩いていったのが見えた

「どうした明久？何でそんな顔してるんだ？」

少し焦っているようにも葛藤ともとれる表情をしている

「いや、なんでもないよ」

もしかしたら明久は雄二と姫路が離れた場所で話しているのがシヨツクだったのか
なら、特に心配する必要も無いだろうに

「ま、元々興味があつたが、きつかけはコイツが相談をしてきたつてコトだ」

「あの、吉井君がそんなことを言い出した理由って？」

話をしながらこつちに戻ってくる二人もしかして今回の試召戦争について話していたのか？

「さて。そういえば、振り分け試験で何かあつたみたいだが、それと関係があるかもしれないな。バカはバカなりに譲れないものがあった、ってコトだろ？」

茶化しているのか笑顔で答える雄二

「振り分けって　それじゃ、やっぱり」

「俺の口から言っていていい範囲はこれが限界だと思うが　多分、姫路の想像は間違っていないと思うぞ」

そう言って会話を終わらせる雄二

「さて明久、慧汰、そろそろ帰るぞ」

「あ、うん。姫路さんとはもういいの？」

「ああ。これで決心も固まったろうし、な？」

雄二が問いかけると茹蛸のように真っ赤になった姫路、人間はここまで赤くなるのか

「ふーん、そっか。よくわからないけど、それじゃ帰ろうか。姫路さん、またね」

「あ、はい！さようなら！」

顔を未だに赤くしている姫路に手を振られながら俺達三人は教室を後にした

「それにしてもさ」

「ん？」

「Dクラスの勝負って本当に必要だったの？別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うけど」

「ああ、それか」

「理由は多分だがクラス全員に戦争に慣れさせる為、士気を上げる為じゃないのか？」

自分なりに考えてみた予想を言ってみる

「ああ、それ以外にも他のクラスにプレッシャーを与えるのもある」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「目的はあくまでAクラスだからな。Dクラスの設備を手に入れることで一部の奴らが満足して試召戦争に反対し始めるかもしれないだろ？そうならない為に不満によるモチベーションを維持する為だ」

聞いていてここまで考えているのかと思うとやはり過去に神童と呼ばれていたのが頷ける

「Aクラスに勝てるかな？」

「勝つしかないだろう？」

負けたらこれ以上設備が下げられるのかもしれないのだから

「無論だ。俺に任せておけ」

「……ありがとう。僕のわがままの為に」

「お前のわがままの為じゃない」

「別にそんなわけじゃない。試召戦争は俺がこの学校に来た理由そのものだからな、そして目的の為に、明久も慧汰きっちり協力してもらうからな。とりあえずは明日補給テストだ」

「……………」

「ゲームしないで、寝る前に少しくらい勉強でもしろよ?」

「はいはい。教科書くらいは読んで……………」

「どうした」

「あ!教科書、卓袱台の下に置いたままだった!」

明久の奴、こんな調子で大丈夫か?

「……………」

「…雄二、明久は阿呆じゃない馬鹿だ」

「そうだったな」

「二人とも酷くない!?!?うう……………」

「何を言ってる?当たり前だろう?」

「もちろんだ。待ってるはずがない」

「わかっていたけど、薄情もの!!」

走って学校に戻る明久を背に家に向かう

「なあ、慧汰」

「どうした？」

「後ろからすごい視線を感じるんだが」

「奇遇だな俺もさっきから思っていた」

後ろから視線が突き刺さる

「やることは一つしかないな」

「お前が明日元気に登校してくることを祈る」

「お前もな」

そう言って俺と雄二は全く別の道を曲がり全力で走りだした

問8 交渉と暴力と戦争後（後書き）

少し短いような気がします。ここまでは、最初はもっと長かったのですが

さすがに長すぎても見難いのでここで切りました

誤字脱字の報告、アドバイスや感想などよろしくお願いします

問9 午前のテストと昼食前（前書き）

三日、四日に一度と言いましたが少し時間が出来たので投稿させていただきます

拙い駄文ですがどうか楽しんでいってもらえたら幸いです

問9 午前のテストと昼食前

問

以下の問いに答えなさい

人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい

姫路瑞希の答え

? 脂質 ? 炭水化物 ? たんぱく質 ? ビタミン ? ミネラル

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね

吉井明久の答え

? 砂糖 ? 塩 ? 水道水 ? 雨水 ? 湧き水

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え

初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……

教師のコメント
保健体育のテストは一時間前に終わりました。

菊井慧汰の答え

? 安全な家 ? 安心して食事が出る所 ? 心置きなく寝れる部屋
? 普通の食事 ? 餌

教師のコメント

この回答にあなたがどれだけ危険な生活をしているか不安になります

翌朝、前日の疲れのせいでグッタリしながら学校に来る

「おう慧汰、昨日はお疲れだな」

教室の扉を開けて最初に見えたのは雄二だった

「雄二、よく生還できたものだな」

「お前が言うか」

「お前もだろ」

昨日のことを思い出してさらに疲労感が増す、雄二も同じようだ

「「思い出させて悪かった、雄二（慧汰）」」

俺と雄二はすぐに頭を下げて謝った

そう言えば昨日明久が島田に変な嘘をついた事言っただけでなかったな

すぐに携帯を出してメールを送る

「疲れたから休ましてくれ」

「わかった存分に休め」

そう言っただけで俺は風通しの良い場所で自前の枕で寝た

「昨日の恨み……今ここで晴らす!!」

危険な雰囲気と言葉を聴いてすぐに起きて体を仰け反る

「ちい！運の良い奴め！」

スタンガン（20万ボルト）を構えて、明久に攻撃する

「こんな攻撃当たらなければ大丈夫!!」

「昨日よりも動きが格段に良くなっているだろ!？」

隙を付かれて一気に間合いを詰められカッター（刃出し状態）を向けられる

「吉井!!」

「うぶはあ!」

不意に明久の隣から拳が飛んでくる。そのくらった勢いで明久は壁に衝突する

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよ!」

随分と怒っているな島田

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね……!」

倒れている明久の腹を何回も全力で踏む島田、……明久見捨てたって何をした?

「おかげで彼女にしたいくない女子ランキング上がったじゃない!」

そんなランキングあるのか、ウチの学校の新聞部も暇だな

「と本来は掴みかかっているんだけど」

掴む前に結構攻撃しているが島田はまだまだ満足していないようだ

「アンタにはもう充分罰が与えられたようだし、許してあげる」

「うん。さっきから鼻血と吐血が止まらないんだ」

「いや。そうじゃなくてね」

「ん？それじゃ何？」

島田は心底愉しそうに笑っている

「1時間目の数学のテストだけど、監督の先生は船越先生だって」

それを聞いた瞬間明久は扉を開けて廊下を駆け抜けていった

「うあー……疲れた」

そう言いながら机に突っ伏す明久

四教科が終わって昼休みになっている、ちなみに明久は数学のテスト終了後の休み時間に船越先生に呼び出されているから尚更だろう

「あの後どうした？」

「近所のお兄さんを紹介しておいたよ」

「疲れたのう」

近づいていた秀吉が呟く、今日は髪を後ろに結びポニーテールのようになっているが

「……秀吉、そんな髪型しているから女だと思われるんだぞ？」

「なんじゃと!?!」

「慧汰何余計なこと言ってるのさ!それじゃもうこの可愛いポニーテールの秀吉が見れないじゃないか!」

「……………(コクコク)」

気配を消して後ろに立っていたムツツリーニもいる

「本当にやめた方がいい気がしてきたのう」

秀吉は本当に気が滅入っているようで少しテンションが下がっている

「よし、昼飯食いに行くぞ!今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「どっつやったらそんな量が入るんだ?」

「成長期の男は皆これくらい入るだろ?」

「普通は入らんだろ」

「だからお前はそんなに線の細い身体してるんだ」

確かに自分の身体は一般男子と比べて軽いけれど（身長168cm

体重 46kg）

普通さすがにあそこまで入らないと思う本当にどんな胃袋しているんだか……

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「……………（コクコク）」

何か忘れてる気がするが……多分大丈夫だろう

「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」

「滅相もございません」

向こうは向こうで楽しそうだ

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを」

「明久何か食いたいの言ってみろ、奢ってやるから」

「本当に!？」

「慧汰は明久に甘いのう」

「いや秀吉、塩水が贅沢と言っている奴にはしょうがないと思うんだが……」

「そうじゃな……」

「あ、あの。皆さん」

後ろから姫路さんの声が聞こえる

「うん?あ、姫路さん。一緒に学食に行く?」

「あ、いえ。え、えっと……お、お昼なんですけど、その、昨日の約束を……」

そういえば約束をしていたな、ちゃんと作ってくるあたり本当に真面目だ

「おお、もしか弁当かの?」

「は、はい。迷惑じゃなかったらどうぞ」

後ろに隠し持っていたバッグを出してくる

「迷惑なもんか!ね、雄二!慧汰!」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「悪いなこんなバカの為に」

「そうですか、良かったあゝ」

「むー……。瑞希つて、意外と積極的なのね……」

確か島田も明久が好きだったな、頑張れ島田応援してるぞ

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「そうだな」

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買って来る。昨日頑張つてくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

珍しいな雄二と島田がこんな気遣いをするとは、特に雄二だ何か裏でもあるのか？

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

「きちんと俺達の分をとっておけよ」

「雄二、この脳味噌がお花畑の奴のジュースの分はいらねいぞ？」

「誰が脳味噌が枯れたお花畑だつて!？」

「お前のお前、それと枯れたとまでは言っていない」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くならないはずだ。じゃ、行ってくる」

二人は教室を出て行った、多分売店だろう

「僕らも行こうか」

「そうですね」

明久が姫路のバッグを受け取る……男子達、そのFFF団と書いてある被り物はなんだ？

「天気良くてなによりじゃ」

秀吉が言ったとおり空は快晴で気持ちがいい

「そうですねー あ、シートもあるんですよ?」

姫路がバッグからビニールシートを取り出す

「気持ちいいねー」

「……………（コクリ）」

「あの、あんまり自信はないんですけど」

そう言いながら重箱の蓋を開ける

「「「「「おお！」「」「」

一斉に歓声をあげた

見るからに旨そうな唐揚げにエビフライ、おにぎりやアスパラ巻きが重箱を彩っている

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」

「……………（ヒョイ）」

「あっ！ずるいぞムツツリーニ」

「……………（パク）」

素早いムツツリーニがエビフライを取り、口に入れる

バタン ガタガタガタ

思いつきり顔から倒れて痙攣している

「「「……………」「」「」

明久と秀吉と顔を見合わせる

「わわっ、土屋君!？」

姫路は慌ててムツツリーニ詰め寄る

「……………(ムクリ)」

ムツツリーニは飛び上り

「……………(グッ)」

ムツツリーニ…美味しいと伝えたい気持ちはわかるが、立っているだけなのに足が震えて今にも倒れそうなお前を見ていると凄く辛い気持ちになる

「あ、お口に合いましたか？良かったです、良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路は本当に嬉しいようで笑顔で弁当を勧めてくれる

「姫路、一つ聞きたいんだが」

「はい？なんですか？」

「おかずの調味料に何を入れた？」

それは開いてはいけないパンドラの箱だったことにその時はまだ誰も知らなかった

問9 午前のテストと昼食前（後書き）

誤字脱字の報告、アドバイスや感想などいつでもお待ちしております

問10 昼休みと弁当と生存競争（前書き）

まず最初に皆様にお詫びをもうしあげます

いきなり「一身上の都合により三日、四日の投稿になります」と報告しましたが

これでは見てくださっている方には大変失礼だと思いましたが、これから掲載日を決めてやっつけていこうと思います（活動報告でも言っています）

掲載日（予定）火曜日 木曜日 日曜日 とさせて頂きます
心からお詫び申し上げます

問10 昼休みと弁当と生存競争

問

次の() に正しい年号を記入しなさい

() 年 キリスト教伝来

霧島翔子の答え

1549年

教師のコメント

正解。特にコメントはありません

菊井慧汰の答え

1549年(天文18年) 8月15日

教師のコメント

あなたは歴史を全て日単位で覚えているんですか

坂本雄二の答え

雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです

姫路に質問してから背中に尋常じゃないくらいの嫌な汗が流れている

「普通のじゃつまらないと思ったので、刺激にトリクロロベンゼンを少々……」

俺の予想のはるか斜め上の回答が返ってきた

普通は『刺激が足りないから』という理由で調味料にタバスコや七味唐辛子など使う人はいるが、まさか有害物質を料理に入れる人は始めて見た

トリクロロベンゼンは皮膚腐食性・刺激性に呼吸器に刺激に恐れ、また全身毒性により肝臓、甲状腺、腎臓、副腎の障害の恐れがある。さらに発がん性もある危険物であって決して調理に使うものではないはずだ

「それと、他にも色々……」

「おかしいだろ!?!」

ついに本音が出てしまう

「え? 何処がですか?」

本当に『何がおかしいのか分からない』といった顔で此方を見る姫路

「普通の家庭はそういう物が手に入らないはずなんだが……」

どういふ家庭で暮らしているのだろうこの子は

「え？普通家に置いてあるんじゃないんですか？」

「……」

季節は四月、旧暦では卯月きと呼ばれている時期に天気は快晴、日の光が存分に降り注ぐ昼は少なくとも暖かいはずだ、暖かいはずなのにいま此処だけ氷河期のように寒いのだろう

さっきの話しから考えると多分トリクロロベンゼン並のモノが入ってるのだろう

そんな危険物が当たり前のように入っている料理に恐怖を感じらずにはいられない

緊急で明久、秀吉に小声で会議をはじめ

（明久、秀吉あの料理どう思う）

（あれは食べ物ではなく、化学兵器じゃろう）

（……これは、明久が食べるべきだな）

（うむ、そのとうりじゃな）

（何で僕なの！？二人して僕を殺すつもり！？）

（これは元々明久のために作られた物だ、これは明久がちゃんと食べる必要がある）

(いくらカロリーが欲しくても命を賭けたくないよ！)

「遠慮せずにドンドン食べてくださいね」

笑顔でさら化学兵器^{へんがく}を勧めてくれるんだが、こちらとしてはまだ命をかける一歩でも足をかけたら崩れ落ちるボロボロの橋を渡りたくない

(……ここはワシが逝くしかないようじゃな)

(待つて！危ないよ)

(いや、ここは明久を縛りつけてでも食わせるべきだ)

(それはやめて!!)

(大丈夫じゃ、ワシの胃袋は少々頑丈でのジャガイモの目ではビクともせん、今回ランクは違うがワシの胃袋を信じてほしい)

ジャガイモの芽成分のうちに毒性があるのがチャコニンやグリコアルカロイド、

グリコアルカロイドの致死量は成人体重1kg当り約5mg、成人が350mg摂取すると中毒をおこしたり最悪死んだりする。しかし人は苦みに敏感なので現実にはそこまで食べられないが……

確かにそれを食べても大丈夫なら結構安心できる

(そうか、お前が言うのなら止めはしない)

そう言って緊急会議から秀吉の見送りに変わった

「二人は遠慮しているようじゃし、ワシが頂くとしようかの」

「はい、どござ」

（では逝くとしようかの、おぬし達と会えて楽しかったぞ）

（お前の最期をしっかりと見届けてやる）

（ダメだよ秀吉！！まだ雄二がいる、雄二に無理やり食べさせれば大丈夫だよ！！）

「頂きます」

秀吉が化学兵器へんたくうを手にとり

パク

と口に放り込む、……ムツツリー二の時と違い倒れずにそのままの状態で秀吉が固まっている

（大丈夫か秀吉？）

（……………）

（秀吉？）

全く反応が無い、少し体を押すとそのまま倒れていった

ガタガタガタガタ

よく見るとムッツリーニと同じように目に生気が全く無く体が痙攣している、どうやら今回は遅効性だったようだ

まさかジャガイモの芽を耐えるくらいの胃袋ですらこつも簡単に壊されるのか、いや当然の結果か

「どうしたんですか!？」

「いや、……………弁当……………が……………あまり……………に美味かつ……………たから……………感動……………して……………倒れたのじゃ」

そう言つて、秀吉は痙攣しているだけでそれ以上何も話さなかった

「そうなんですか」

また嬉しそうに笑顔になる姫路、いくら料理が美味しくてもああはならないぞ

「おう、待たせたな!へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ?」

「あつ、雄二」

雄二が登場して化学兵器たまこやきを口に放り込む、近くで二人が痙攣しながら倒れているのにそこは触れないのか?

パク　　ボタン　　ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

なんだろうこのデジャヴは

ジューズの缶がぶちまけられ、顔から思いっきり地面に叩きつけられた

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの!？」

遅れて島田が駆け寄ってくる

(おまえら、毒を盛ったな?)

目でそう訴えかけてくる雄二、ここは素直に真実を告げよう

(毒じゃないよ、姫路さんの力だよ)

(トリクロロベンゼンやその他色々有害物質が入っている料理を雄二が食っただけだ)

(馬鹿を言うな、あの姫路がそんな危険物を入れるはずがないだろう?)

(さすがに学年次席並みの学力を持つ姫路がそんな物入れるとは思わないな、だが受け入れるこれは真実だ)

「あ、足が…………… 痺ってな……………」

姫路に傷つけないように嘘をつく、ちゃんと受け入れてくれたようだ

「あはは、ダッシュで階段昇り降りしたからじゃないかな」

「無理はほどほどにしておくことだな」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられていると思うけど」

島田はこれから先の惨劇を見ないように、早々に退場を願うしかない

さっそく緊急会議を始める

(明久)

(大丈夫、言いたい事は分かっているよ)

(そうか、頼んだ)

「ところで島田さん。その手のついてるあたりにさ」

明久が座っている島田の手に指を指す

「ん？何」

「さっきまで虫の死骸があったよ」

「ええ！？早く言つてよ！」

島田がそれを聞いて急いで手をどける

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がよいよ」

「不衛生だし手を洗いに行つてこいよ」

「そうね。ちょっと行ってくる」

走って手を洗いに行く島田、これで犠牲者が一人減った

（悪いな、明久）

（ううん大丈夫だよ、でも問題はこれからだね）

（姫路のあの料理を食わずにすむ方法、これはどうすることも出来ない）

チラッと見ると、姫路が不思議そうな顔をして見ている

（慧汰、僕に考えがある）

珍しく明久が真面目な顔をしている

（僕が姫路さんの気を逸らすから、その間に慧汰が雄二に化学兵器の中身を全て食べさせるんだ）

（明久！これ以上アレを食べたら死ぬ！！）

必死に雄二が明久を止めようとする

（……分かった）

（慧汰！俺を売りやがったな！！）

（お前のことは三分間は忘れない）

(お前ら絶対に呪い殺してやる!!)

不吉な言葉を投げかける雄二を他所に俺達は作戦を決行する

「あつ！姫路さん、アレはなんだ!!」

バカか！？そんな古典的は方法で姫路が引つかかるわけが

「え？なんですか？」

引つかかるのか……

気を取り直し、すぐさま左手で化学兵器へんとうを手に取り

「おつと手が滑った！」

思いつきり右腕で明久に鳩尾に強打する

「ぐふう!!」

倒れた明久の口に化学兵器へんとうの中身を捻じ込み租借を手伝い

雄二が買ってきたジュースを流し込んで無理やり飲み込ませる

「こんなもんか」

「……お前、結構酷い奴だな」

これは生き残る為の戦いだ四の五の言ってられない

「姫路、明久が見間違いだっ たって」

「あ、そうですか」

よくもずつと向こうを見ていてくれたものだ、流し込んでいるときに振り向かれたらどんなに傷ついたことだろう

「あ、早いですね。もう食べたんですか？」

「ああ、俺も少し食べたが明久があまりにも美味しいからってほとんど独り占めして凄い勢いで全部食べたよ」

当の明久は秀吉やムツツリー二とは違い、痙攣せず静かに横たわっていた

「死んだはずのお爺ちゃんがこの川の向こうにいるんですけど、その船乗らせてくれませんか？」

……小声でそう言っているがきつとそこから還ってきてくれるだろう

「そうなんですか？」

さっきの明久の小声は聞こえなかったようだ

明久が美味しいと食べたのがよほど嬉しかったのかパアッと凄く嬉しそうな笑顔をしている

良かったな明久これからもお前に弁当を作ってくれそうだ

これで俺の食べる分が無くなった、そうなるともう怖いものは無い

「あ、そういえば」

ゾクリと体を覆いつくすような悪寒がいや本能が危険を告げる

待て、大丈夫だ、化学兵器へんとうのおかずは全て明久が食べてくれたもう何も無いはず

「ど、どうした？」

嫌な汗が止まらず、平常心を保とうとしているが声が震えてしまう

「実はですね」

化学兵器が入っていた鞆を漁り始める

いや、まさかそんなハズはない。初めての手作り弁当を作るんだでアレを作る時間が足りないはずだ

「デザートもあるんです」

そう言いながらヨーグルト（だと信じているモノ）が入っている容器を取り出す

「姫路！何だアレは!?!」

必死に目を背け現実逃避をしていたが、死の呪文デザートと背けられない事実を告げられた瞬間条件反射で叫んでしまった

「え？またですか？」

また引つかかる姫路、本当にその純粹さが不安になる

さっそくデザートの容器を取り、蓋を開け、死んでいる明久の口にヨーグルト（だと信じているモノ）を流し込む

化学兵器と化学兵器を胃の中で化学反応させるともしかすると生き返るかもしれない

「ゴばあ！」

盛大にイロイロと噴出す明久、よかつたちゃんと痙攣している

これで明久も生き返ったし危険物も排除出来たから一石二鳥だ

「菊井君、何もありませんよ？」

こつちを振り向く姫路、お前はもう少し人を疑うことを知るべきだと思っ

「そうか、ゴメン俺少し目が悪くてさ」

「そうなんですか。……あれ？デザートももう食べられたんですか？」

「ああ、明久が全部食べたぞ」

「もう、吉井君は食いしん坊なんですな」

「そうだな、今度は明久だけに作ったらどうだ？」

これで（明久を除く）皆の安全が確保出来るかもしれない

「え！？その……あの……」

顔を真っ赤にして俯く姫路、本当に分かりやすい

「あ、あの……！」

「どうした？」

「菊井君はまだデザート食べてないんですね？」

もしかしたら『明久に弁当を作ってあげたら？』と言う言葉が駄目だったのか？

コレはヤバイ気しかしない、逃げたい今すぐ逃げたい。

ここは学校の屋上、ここからフェンスを越えて飛び降りたほうが生き残れる確立が高い気がする

いや待てここは落ち着け冷静になるんだ。冷静になればこの状況を何とか出来るかもしれない

「あ、ああ。そうだな」

素直に応答してしまい自分の退路が絶たれる

「やっぱりそうですか、実はデザートを少し多く作ってしまってそっちの容器に入りきらなかったんですが、こっちにまだヨーグルト

が入っているので食べてください」

そう言ってさっきの容器より一回り小さい容器を蓋が開いた状態で渡してくる

「え、いや、その……はい……」

目の前で笑顔でデザートを勧められたら断れないだろう、因果応報とはこのことか、ここは腹を括って食べるしかないな

「いただきます…（パク）……ゴばあ！……！」

明久、無理やり食わせて悪かった…意識が途切れる前にただ一言俺は明久に謝りたかった

これは後から聞いた話だがこの後島田がこの惨状を見て急いで保険医を呼んでくれたそうだ

問10 昼休みと弁当と生存競争(後書き)

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想などよろしくお願いします

問11 午後と作戦と幼馴染

問

以下の問いに答えなさい

バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい

姫路瑞希の答え

リトアニア エストニア ラトビア

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

アジア ヨーロッパ 浦安

教師のコメント

土屋君の国の定義が気になります

吉井明久の答え

香川 徳島 愛媛 高知

教師のコメント

正解不正解の前に数が合っていないことに違和感を感じましょう

菊井慧汰の答え

日本以外の地理には興味がありません

教師のコメント

興味を持ってください

皆死線を越えて（保健医のおかげで）今までどつりの他愛の無い会話をしている。

ただしおかしいとすれば、集まっている男子が全員小刻みに体が震えていることくらいだ

「そつえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん」

次の試召戦争前はDクラスだが、……今回はどのクラスとやるのか俺も検討があまりついていない

段階を踏むならCクラス、背伸びをするならBクラス、博打に出るならAクラス

雄二は頭の回転が早いから俺ではどついう意図でやるのか分からない

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

「雄二、何故だ？いきなりAクラスでは勝てないのは分かるが何故Bクラスなんだ？」

いきなり学年で二番目の学力を誇るBクラスとやるとなるとかなり危険な橋を渡り続けなければならない

「Bクラスとはこの戦争でのシステムを使って交渉しようと思っ
な」

「交渉？」

「慧汰、試召戦争で下位クラスが負けた場合はどうなるか知ってるよな？」

「確か設備を落とされるんだよな」

「そうだ。だからBクラスがAクラスと戦って負けるとCクラスの設備に落ちるわけだ」

「では明久、上位のクラスが負けた場合は？」

「えー！？えーと……うーんと……悔しい？」

「はあ……雄二このバカをどうにかしてくれ……」

「悪いな慧汰このバカは救いようが無い……」

「二人とも酷くない！？僕はそこまでバカじゃないよ！！！」

「ムツツリーニ、ペンチ」

「……………（ツス）」

しっかりと二人分のペンチを持ってきてくれたムツツリーニ、本当に助かる

これだけ気配を消して行動しているのだから、雄二が情報収集にはムツツリーニを使うのがよく分かる

「雄二、まずどの爪からにする？」

「小指からでいいだろう」

「僕を爪切り要らずの身体にするつもりか！？」

「次嘘ついたらだけどな」

珍しくあの雄二が猶予をあげている

「明久の代わりに俺が変わりに答えるが、上位クラスが下位クラスに負けると設備が入れ替わる。だからBクラスが俺達Fクラスに負けると最低の設備になるわけだ」

「そうだ。だから勝ってBクラスとの交渉に、『設備を入れ替わらない代わりにAクラスに攻め込む』と言うだけだ。設備を入れ替えたらFクラスの設備、Aクラスに負けたらCクラスの設備になる。これならどっちが得か分かるだろ？」

「ふんふん。それで？」

「この次のAクラスに行く使者はこれをネタにして交渉をする。『Bクラスとの直接勝負に攻め込むぞ』とな」

「なるほどねー」

「いくら学年2番目のクラスの奴らとの戦争直後でも最低クラスに負けるはずがないと言ってくるんじゃないか？」

戦争の後の戦争でもFクラスは難なく倒せると思っているだろう、
そうなれば雄二の望む一騎打ちは出来ない

「大丈夫だ」

俺の方を見ながら笑う雄二

「何か策でもあるのか？」

「Aクラスへの使者には慧汰に行ってもらおう」

「は？何を言っている？」

「Aクラスの場合は明久より慧汰の方が安全だからな。もちろん交渉相手はアイツだ」

「むしろ俺の身の危険が感じられずにはいられないんだが」

「雄二、アイツって？」

「はなかわあかね花川紅音だ」

花川紅音、学年で3番目の学力を持っているが本当は学年主席と同じぐらいじゃないかと噂されている

小さい頃からの腐れ縁で幼稚園から今の高校までずっと同じクラスになるくらいだ

「なんで慧汰と花川さんが？」

「ああ、そういえばあまり知らされてなかったな。花川と慧汰は幼馴染なんだ」

「……………(ブバツ)」

幼馴染と聞いた瞬間にムツツリーニがいきなり鼻血を噴出した

それはもう人の身体の中にある血液のほとんどを出したかのような赤い水たまりが出来ていた

「誰かムツツリーニに輸血を……！」

「……………大丈夫、ちゃんと輸血パックは持ってる。」

「……………ムツツリーニ、俺と紅音で何を想像した？」

「百合」

「俺は男だぞ！？何故百合にされなきゃいけないんだ。俺は男で紅音

は女、どこに百合の要素がある!？」

「え? 慧汰って偽名で本当は女だけど、頑張ってる男を装ってるんでしょ?」

「明久、一回お前と話し合わなければならぬらしいな。第一俺が男を装って何か得があるのか? それに偽名じゃない」

明久の頭の中で俺は一体どう思われているんだ?

「得って言うと、百合の人達から逃げられる慧汰その関節はそつちに」

ゴキつといい音が明久の腕から聞こえてくる。

明久は腕を押さえて悶苦しんでいる

ふと思ったんだがいつも明久は怪我をしている気がするんだが……

「話が逸れたな、まあ今の問題はAクラスよりBクラスが先だ。Bクラスへの使者はいつでもどつり明久に行ってもらう、明久は今日のテストが終わつたらすぐに宣戦布告してこい」

「また!? 嫌だよもうあんな事されるのは!」

「明久、お前は何を勘違いしている?」

「え? 慧汰?」

「お前に拒否権はない」

「あんまりだ!!」

明久が拒否するといろいろ面倒なことになりそうだからこつするの
が一番だ

「大丈夫だ明久。」

「雄二、何で？」

「Bクラスは美少年好きが多いらしいからな」

「そっか、なら大丈夫だね？」

「いや雄二、明久は不細工だぞ？明久が行くと殺されかねない」

「失礼な!! 365度どこからどう見ても美少年じゃないか!!」

「5度多いぞ」

「一周と5度か」

「実質5度じゃな」

「三人なんて嫌いだ!!!!」

いつきに屋上から走り去っていく明久、これで使者として行っ
てくれそうだ

「とにかく頼んだぞー」

「言い訳を聞こうか」

午後のテストが終わった放課後、明久はちゃんとBクラスへ使者として向かって行った

そしてBクラスの暴行を受け、面白く破れた制服を抑えながら雄二と俺に問い詰めている

「予想どおりだ」

「当然の結果だな」

「くきいー！殺す！！殺し切るー！！」

「「落ち着け」」

雄二が鳩尾強打^{みぞおち}、俺は顔面強打で明久を思いっきり殴る

痛みで明久が畳の上をのたうち回っている、これ昼休みに似たようなものを見た気がする

「うう…腹が…目が…鼻が…」

倒れている明久を尻目に俺と雄二は教室を出る

「そついえば雄二？」

「ん？何だ？」

「霧島とは別れたのか？」

霧島翔子、才色兼備なんだが百合疑惑が浮上している。実際は異性に興味が無いわけではなく雄二のことを一途に想っているので雄二以外に興味がないだけ

「おい待て！俺はまず翔子と付き合っていない。」

「傍^{はた}から見たらお似合いなのに、霧島が可哀想だ」

「俺は翔子のことなんとも思っていない」

「……………雄二、握力には自信がある」

「しよ、翔子！！いつからそこにぎゃあああああああ！！！」

突如現れた霧島が雄二にアイアンクローをしている

しかし出血する位の握力って、大人しい大和撫子のような見た目からは想像できない

「慧汰、一緒に帰ろ」

不意に後ろから聞きなれた声が聞こえてくる。振り向くと幼馴染の紅音が凄^ひい至近距離で立っていた

名前のとおりの赤というより紅の髪の毛、長さは大体後ろが首筋く

らいで横髪は顔よりも少し長く、前髪はヘアピンで左目を出して右目が髪の毛で隠れている

しかし暗いという印象は受けず、クールという印象が強い

目は綺麗な翡翠色で肌は普通の色より少し白い。幼馴染という色眼鏡を外しても結構の美人だと思う

「紅音、お前いつからいた？」

「慧汰が教室に出たときから」

「それって最初からか…」

全く気が付かなかった、まさかずっといたとは……

ムツツリーニといい霧島といい紅音といい最近の奴らはこれが普通なのか？

「何で昨日は逃げたの？」

口調は結構静かだが

「紅音、その手に持っているものは何かな？」

「翔子ちゃんから貰ったの、慧汰が私から逃げないように手錠をしようと思って。安心して？手錠の鎖と私のバッグ繋がってるから」

「安心出来るか！そんなものさっさと捨てる！！」

「じゃあ毎日一緒に登下校してくれたらいいよ」

「断る」

ふと雄二の方に視線を向けると……

「翔子、その隠している物は何だ？」

「スタンガン（20万ボルト）」

「そんな物騒なもの持ってるんじゃない?!」

「皆持つてる」

アイツはアイツで苦労しているようだ

「ほら、早く帰ろ？」

「待て紅音、何故当たり前のように腕を組む動作から関節を極めるんだ？」

「逃げられたら嫌だから」

「こんなことされたら誰だって逃げるわ!!」

関節を極められていない左手を制服の内ポケットに素早く手を入れて

「慧汰無駄だよ？何年間一緒にいると思ってるの？」

左手を掴まれて予想外の怪力でスタンガンが取り出せない状態になっている

腕を犠牲にしても足払いで

「だから無駄だって」

左腕が拘束から解かれたと思ったら紅音の手に俺のスタンガン（20万ボルト）が持っていた

「ぎゃ嗚呼ああああああああああああ！！！！」

「これ毎日慧汰が持つてるんだよね？だから貰うね」

そういつて当たり前前のように自分のバッグの中にスタンガンを入れる

「じゃあ慧汰、帰ろっか」

「……雄二、私達も」

こうして俺達（雄二は制服の襟を掴まれて、俺は手錠をかけられて紅音のバッグに繋がっている）は下校という名の連行をされた

問11 午後と作戦と幼馴染（後書き）

やっとオリヒロインが出てきましたね
これから先どうなるんでしょうかね？

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想などよろしくお願いします

オリキャラ紹介(前書き)

オリヒロインもやっと出てきたのでここで主人公、ヒロインの紹介です

オリキャラ紹介

菊井慧汰

性別 男

容姿 眉目秀麗 どこからどう見ても凛々しい女性

細身で少し華奢どれくらいかって言うと普通の細身の女性より少し

細い

肌も白い

髪は綺麗な真っ白で後ろ髪だけ背中にかかるくらい長く他は横髪は肩にかかる、前髪は目にかかるくらい長く少し左側によっている瞳はスカイブルー色

身長168cm 体重46kg

召喚獣

80cmくらいのデフォルメされた慧汰

服 黒の着物(男物)

武器 刀 懐刀

腕輪能力 身変わり 自分の決めた相手の召喚獣の位置と自分の位置を交代する

現在の科目別能力

文系一科目あたり490～570 理数系一科目あたり100～220

英語、保健体育1～10 総合科目2300～3200

花川紅音

容姿 紅色の髪の毛後ろ髪の長さは首筋くらい横髪は顔よりも長い、前髪は(小さい頃慧汰があげた)ヘアピンで左目を出しているが右目は前髪に隠れている

体系 細身

瞳は翡翠色

身長 162cm 体重 作者が殺されるので言えませぬ

スリーサイズ 作者がコンクリに詰められて東京湾に捨てられるので言えませぬ

召喚獣

80cmくらいのデフォルメの紅音

服装 赤と黒のゴスロリ服

武器 レイピア

腕輪能力 拘束 100点あたり1人の動きを鎖を飛ばして封じる

腕輪能力をえるのが400からなので4人

現在の科目別能力

文系一科目あたり 370～420 理数系一科目あたり410～470

英語 390～460 保健体育 400～430 総合科目 3

900～4400

問12 処刑と血と姐御(前書き)

連続投稿です

問12 処刑と血と姐御

問

PKOとは何か、説明しなさい

姫路瑞希の答え

Peace - Keeping Operations (平和維持活動) の略。

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします
余裕があれば覚えておくと良いでしょう

174

土屋康太の答え

Pants Koshitsuki Oppai の略
世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか

吉井明久の答え

パウエル・金本・岡田 の略

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です

菊井慧汰の答え

パキスタン・カザフスタン・アフガニスタン

教師のコメント

それでどうやって世界を守るんですかそれとそれではPKAです

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

俺と雄二は命かながら逃げ延び、いつもどおりの学園生活を送っていた

今日も午前中がテストで、さっき総合科目のテストが終わり皆昼食

を食べていた

昨日と違い姫路の料理がないので皆身の安全は保障されて

「吉井君、お弁当頑張って作ってきたので食べて下さい」
ないところもあるようだ

「諸君。ここはどこだ？」

「「「「最期の審判を下す法廷だ！」「」「」

「異端者には？」

「「「「死の鉄槌を！！」「」「」

「男とは？」

「「「「愛を捨て、哀あに生きるもの」「」「」

「宜しい。これより 2-F 異端審問会を開催する」

「え？何これ！？何で縛られてるの！？」

明久は怪しい覆面を被った奴らに縄で縛られている

「罪状は？」

「被告、吉田明久が我々の心のオアシス姫路瑞希さんからお弁当を
食べてほしいとのことです」

「なるほど 被告、吉井明久。」

「は、はい!」

「斬殺、爆殺、撲殺、絞殺、毒殺、圧殺、射殺、轢殺のどれがいいかね?」

こいつ等本気で明久を殺す気のようにだ

「どれも嫌」

「明久昨日も姫路の弁当食ってたよな?」

「惨殺!」

スチャ (一斉にカッターを構える音)

ヒュ (一気にカッターを投げる音)

ザクザクザクザクザクザク (カッターが明久に突き刺さる音)

本当に惨い殺り方だ、明久から大量の血が流れ出す

「……………おい、異端審問会とやら」

「ハ!ハイ!」

「何をしている?」

「明久を処刑しているのであります」

「そのせいで畳、座布団、卓袱台に明久の血が付いたんだが？」

出来るだけ穏やかに告げよつとするがどうしても抑えられない

「す、すみません!!!」

一斉に土下座をする異端審問会、こいつらにプライドは無いのか？

「頭を上げる」

「ハイ!!!」

「次からは教室にビニールシートをしてからやるんだな」

「慧汰、そこ僕を助けるところだよね!？」

「今のお前に助ける余地があつたか？」

何処を助ければいいのか教えてほしいくらいだ

「さっさと血がシミになる前に拭き取っておけよ」

「皆早く拭くんだ!!!」

「ハイ!!!」

本当に手際がよくすぐに終わらせた

しかも畳の手入れも込みで

「これでいいでしょうか!!」

「ああ、大丈夫だ」

「何か、慧汰直属の部下みたいだぞそれ」

「姐御って呼ばして下さい!!!いえ呼びます!!」

「お前ら男に姐御とは気持ち悪いぞ……」

本当にこのクラスで俺をちゃんとした男と見ている奴はいないのか?

「話逸れてきてるがいいか?」

シビレを切らしたようで雄二が話しかけてくる

「話を戻すが午後はBクラスと試召戦争だ、今回の作戦で重要なのは敵を教室に押し込むこと、だから速さと開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けられない」

「渡り廊下戦で負ける^{イコール}戦争に負けるからか?」

今回の戦争では前線に50人いるクラスメイトのうち、40人を前線につき込むらしい

「そのとおりだ。…皆、もう一度聞く。俺達の目標は?」

「システムデスクだ！」「」

キンコーンカーンコーン

昼休み終了の鐘がなり響く。それは同時に戦争開始の合図でもあった

「野郎共戦争開始だ！！しっかり死んでこい！！」

『うおおおー！！！！』

皆一斉に教室を飛び出し廊下を疾走する

今回の相手Bクラスは文系が多い、そのため俺達Fクラスは理数系の先生を連れ出して極力文系での戦いを減らす作戦だ

「いたぞ！Bクラスだ！！」

「高橋先生を連れているぞ」

向こうからはBクラスの生徒数十人が高橋先生を連れて歩いてきている

「生かして帰すなー！！」

Bクラス 野中長男のながながお VS Fクラス 近藤吉宗こんどうよしむね

総合 1943点 VS 764点

Bクラス 金田一裕子きんだいちゆうこ VS Fクラス 武藤啓太むとうけいた

数学 159点 VS 69点

Bクラス 里井真由子さといまゆこ VS Fクラス 君島博きみしまひろし
物理 152点 VS 77点

さすがはBクラスといったところか、得意科目でもない教科でここまでの点数をとるのだから

たった数人相手に押されているFクラスの一団これだけの実力差なら少しはしょうがないのかもしれないな

「皆一騎討ちで勝てると思うな！！絶対に集団で挑め！！」

俺の指示を聞くとすぐさま多対一で戦い始めた、そのおかげで廊下での戦いが拮抗している

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

遅れていた姫路が集団に追いついた、さすがに体力面ではか弱い女の子のようだ

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ、それと同時に皆の注意が一斉に姫路に向けられた

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

「は、はい。行ってきます」

そして戦場へと向かう姫路

「長谷川先生、Bクラスの岩下律子いわしたりつこです。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込めます」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「律子、私も手伝う！」

「姫路、俺も手伝おうか？」

2対1だとさすがの姫路も辛いだろう

「いえ、大丈夫です」

返ってきたのは自信に満ち溢れた言葉だった

「試獣サモン召喚！」

掛け声と同時に三人の召喚獣が出てくる

敵は剣と槍を構え姫路は前と同じ大剣を持っている、しかしその腕には俺と同じ腕輪が装備されていた。さっきの自信に満ち溢れた言葉の理由はこれだったようだ

「数学は結構出来たみたいだな」

「はい、今回調子が良かったので」

「それって!？」

「私たちが勝てるわけじゃないじゃない!!」

俺たちの会話で向こうも察したようだ

そして少しずつ三人の得点が現れる

Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律子&菊入真由美
数学 412点 VS 189点&151点

姫路の召喚獣の腕輪が光り左腕を敵に向ける

二人は真横に飛ぼうとするが、間に合わず姫路の腕輪能力であろう光線に当たり戦死した

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

俺だけ戦争に入っていないのも後で雄二に殺されそうだから戦いに投じる

「菊井!？」

Bクラスの皆が驚く俺は得意の文系で腕輪能力を使いながら倒していく

「あの能力分かっていても誰と、変わるのか分からねえ!!」

「五月蠅い、さっさと補習室に行くぞ」

鉄人はいつもどつりのようだ

「横槍も服部もやられたぞ!!まだまだ犠牲が出そうだ!!」

「姫路瑞希に菊井慧汰、なんて危険な奴だ!!」

「み、皆さん、頑張ってください!」

「もっともっと攻めろ、敵に補習の隙を与えるな!!」

「やったるでえー!」

「姫路さんサイコー!」

姫路の信者が続出したみたいだな

「姐御おおおお!!」

「皆、姐御の為に勝つぞ!!」

姐御って多分姫路だよな? 姫路と信じたい

それとクラスの為に勝ってくれ

「中堅部隊と入れ替わりながら後退! 戦死だけはするな!」

相手から指揮が飛んでくる、それにより先攻部隊が下がり始める

「今が攻め時だ、追い打ちして先攻部隊全員補習室送りにするんだ
!!!」

「姐御カッコいいっす!!」

何処からか変な声が聞こえてくる

パシャ！パシャ！

「ムツツリーに何をしている？」

「……………慧汰の撮影、これは後で高く売れる」

「売るな！！」

「おお慧汰それとムツツリーニ、ここにおったのか」

「……………それと……………」

心なしかムツツリーニが凹へこんでいる

「秀吉か、どうした？」

「一回教室に戻ってきてほしいのじゃ！！」

いつになく大きな声を出している秀吉、どうやら只事ではないようだ

「ムツツリーニも行くか」

「……………（コクリ）」

そうして俺達は姫路に報告してからFクラスへと戻った

問12 処刑と血と姐御（後書き）

これからBクラス戦本番ですね、慧汰は果たして活躍するのでしょうか？

作者としては活躍してもらわないと辛いですが……
誤字脱字の連絡、アドバイスや感想お待ちしています

問13 戦争とBクラスと人質と(前書き)

サブタイトルが思いつかないです・・・

問13 戦争とBクラスと人質と

問

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい
ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である

姫路瑞希の答え

水酸化カルシウム

菊井慧汰の答え

水酸化カルシウム

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください

土屋康太の答え

塩化吸収材

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように

吉井明久の答え
アンモニア

教師のコメント
それは反則です

「何だ……これは？」

Fクラスに戻り俺は衝撃を受けた、何故なら卓袱台は穴だらけにされ、畳も傷つけられ、座布団も引き裂かれていたからだ

「あ、慧汰。見てよこれ酷いよね」

明久が声をかけてくる、だが俺は全く頭に入らなかった

頭の中が真っ白になり考えがまとまらない、いや寧ろ頭の中がスツキリした

「雄二、どうしてこんな状態になったのか教えてほしい」

「俺達はBクラスとの協定のためにクラスを空けた、十中八九Bクラスがやったのだろう」

「その協定は？」

「四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前九時に持ち越した。その間は試召戦争に関わる一切の行動を禁止するつというのが協定の内容だ」

時計を見ると2時46分、4時までにはまだ1時間14分ある

「雄二、Bクラス代表の名前は？」

「あの根本だ」

根本恭二、あいつにはいろいろと噂が付きまわっていて評判が悪い
『カンニング常習犯』や『球技大会で相手チームに一服盛った』、
『喧嘩に刃物は当たり前』だとかいろいろある

確かに根本ならこんなことはやりかねない

「慧汰、どこへ行くつもりだ？」

教室を出ようとしたところで雄二に止められる

「根本の首級くびを取りに行くのとBクラスの殲滅」

「はあ…今のお前だと止めても無駄だろうな、制限時間の四時までだ分かったな？」

「分かった行ってくる」

教室から駆け出し、廊下を疾走する。Bクラスの連中には今構っている暇がないただただ突き進みBクラスへと向かう

「慧汰！一人だと危険だ、僕も行くよ」

明久も一緒に行ってくれるようだ

得意な文系で腕輪能力を使いながら突き進む

「Bクラス古田幸一が英語で」

「Fクラス須川亮が相手になります！！」

近くにいた須川が身代わりになってくれた

「姐御 いや菊井、ここは俺達がお前の身代りになってやる！！
皆、FFF団として姐御を守るぞ！！」

「……………おおおおお！！！！！！！！！！」

そして俺を中心に陣を作りながらBクラスへと向かっていく

しかし、廊下のかなり前線のほうで戦いが行われていない

「……………どうかしたのか？」

クラスメイトの名前忘れたクラスメイトAで言いか。

クラウメイトAに戦況を尋ねる

「あ、姐御。実は島田が人質にとられてそのせいで相手は二人なのに攻めあぐねています」

学年2番目の学力を持つクラスなのに代表が腐っているとクラスもこつも腐っていくのか

「そうか、とりあえず状況が見たい」

「そうだね。前に行こう」

FFF団と明久と共に向かっていく

人垣を越えるとクラスメイトAの報告どおりBクラスの二人が島田を捕らえていた、どうやらここで時間まで足止めすればいいようだ

教科は英語W、俺の腕輪能力を使って助けたいが助けられない

「それ以上近づいたら、こいつの召喚獣に止めを刺してこの女を補習室送りにしてやるぞ」

以下にも三下な台詞を言っているがムカつく事に手も足も出ない

「慧汰、大丈夫問題ないよ」

「明久？」

明久は深く空気を吸い込み

「総員突撃いー!!!」

「それでいいのか!？」

あまりにも大胆な作戦のせいでもちも驚きが隠せない

「ま、待て吉井！」

向こうから待ったがかかる

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

なるほど、あの怒りようからするとどうやら島田は明久絡みの嘘を吹き込まれてつかまったんだろう

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

当たりのようだ、本当に腐ったクラスだ

「島田さん……」

「な、なによ」

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんてアンタは鬼か」

「馬鹿やるっ!……!」

「ゲフウ！」

島田の変わりに俺が思いつきり蹴る、人間腕力より脚力の方が強い
しな

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？これでも心配
したんだからね」

「FFF団！今のウチに攻めるんだ！！」

島田が明久にあんな優しい言葉を言うはずがない

「どっしてよ！」

「……姐御の命令は絶対！」「」

本当にどうしようもないな

数の暴力で二人を倒し、島田を開放する

「島田、お疲れ」

「う、うん」

「慧汰気おつけて！変装を解いて襲い掛かってくるぞ！！」

「明久……」

確かに警戒はしたほうがいいようだ

「明久、後は任せた。行くぞFFF団!!」

ここは明久に任せておこう

「イエッサー!!」

本陣に近づけば近づくほど敵が増え、時間がかかり仲間もどんどん補習室送りにされていった

20人近くいたのに今ではたった7、8人だ

Bクラスに付き一気に根本まで近づく、根本の近衛部隊もFFF団が庇ってくれた

「根本おおおおおお!!!!」

「ヒイ!!」

あと少いでこの戦争が終わる、後はこの刀を根本の召喚獣に刺すだけ……

「なあーんちゃって、ジャスト4時残念だったね。菊井慧汰ちゃん」

腸が煮えくりかえりそうになった、本当にコイツはム力つく声も性格も何もかも

俺の召喚獣は根本の召喚獣の手前で止まっている。一步踏み込めば根本の召喚獣の持ち点は0になり戦争は終わる

だがそれは『協定を破った汚い勝ち』ということだ、相手は根本だ、

あることないこと織り交ぜて話すに違いない

そうならば雄二だけでなく2ーF組は最低な奴らだと後ろ指指さされることになる

「……………チツ！根本、明日は絶対に殺す。皆さっさと戻るぞ」

「姐御待ってください！」

俺は毒づきながらクラスメイトを連れてBクラスを出た

問13 戦争とBクラスと人質と（後書き）

イロイロと急な展開になってしまいいましたね……
誤字脱字の連絡、アドバイスや感想お待ちしています

問14 部下と俺と防衛線？

問

冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年である

姫路瑞希の答え

603

菊井慧汰の答え

603

教師のコメント

正解です

坂本雄二の答え

603

教師のコメント

一体どうしたのですか？驚いたことに正解です

吉井明久の答え

603

教師のコメント

君の名前をみただけでバツをつけた先生を許してください

「あ、慧汰。おかえり無事だったんだね」

「……その様子だと無理だったようだな」

雄二と明久が俺に声をかける

「すまない。もう少しだったんだがな、明日にはすぐにカタがつく

明久、何故誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をしているんだ？」

「それは　ちょっとね」

明久はそう言いながら島田に視線を移す、島田もその視線に気づいて威嚇で返す

「戦況はどうなっている？」

「俺が根本の目の前で止まり、仲間も少しはクラスの中に入っている」

「姐御、それと俺達の仲間も結構教室前に来ました」

俺が気づかないうちに戦況も大分変わっていたようだ。それと悲しいことに姐御と呼ばれるのに馴れてきたな

「そうか、なら明日すぐに終わりそうだが 相手は根本だ油断出来ない」

「……………（トントン）」

「どうしたムツツリーニ？何か変わったでもあったか？」

ムツツリーニは今回情報係で戦闘にはほとんど介入していない。ただ頻繁にカメラを構えている姿は見受けられたがな

「Cクラスの様子がおかしいだど？」

「……………（コクリ）」

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

Cクラス？何か引つかかるが思い出せない。今回に限り結構重要な事だったはずなのに

「雄二、どうするんだ？」

「そうだな……………」

チラリと時計を見る雄二、まだ戦争が止まって遅い時間ではない

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、

と脅せば攻め込む気もなくなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

「それじゃ今から行くか」

「そつだね」

「秀吉はここに残ってくれ」

「ん？なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障がでるからな」

顔が見られると問題が出る？雄二は何を考えているんだ？

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

秀吉は素直に雄二に従う

「じゃ、行こうか。ちょっと人数少なくて不安だけど」

秀吉を残し、明久、雄二、姫路、ムッツリーニ、島田、俺というメンバーでCクラスに向かう

「……………姐御！！俺達も行かして下さい！！」「……………」

FFF団もとい部下達が頭を下げてお願いをしてくる

「……好きにしろ」

「好きにします!」

これで結構数はそろった、皆でCクラスに向かう

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は?」

Cクラスに入り全員に告げる、クラスにはまだほとんどの人数が残っている。

どうやら戦争の準備というのはムツツリー二の情報どおりのようだ

「私だけど、何かしら?」

黒髪にベリーショートの女子が前に立つ

目の前の女子を見て不意に違和感が俺を襲う。上から見下すような目にニヤついた顔、まるで俺達がここに来ることを見透かしてたかのように

そして何よりその笑い方や視線が誰かと似ている

「Fクラス代表としてクラス間の交渉に来た。時間はあるか?」

「クラス間交渉？ふうん……」

「ああ。不可侵条約ふかしんじょうやくを結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本くん？」

女子は振り返り教室の奥にいる連中に声をかける

根本？…思い出した時にはもう遅い、引き返せない状態だった

「当然却下だ。だって、必要ないだろ？」

奥からついさつき聞いた声が聞こえてくる

この女子ことこぎまゆうか小山友香は根本と付き合っている。さっきの嫌な笑いも見下すような目も誰かに似ていると思ったらコイツだったようだ

類は友を呼ぶと言つが本当にそうみたいだな

「なっ！？根本君、Bクラスの君がどうしてこんなところに」

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言つて」

「先に協定を破ったのはソッチだからな？これはお互い様、だよな
！」

根本の声と共に取り巻きが動き出す。どうやらCクラス生徒だと思っていた奴らは全員Bクラスの生徒だったのか

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を」

「させるか！Fクラス須川が受け立つ！試獣召喚！」

芳野が雄二に攻撃しようとしているところを須川が庇う

「僕らは協定違反なんてしていない！これはCクラスとFクラスの

「無駄だ明久！根本は条文の『試召喚戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まっている！」

「ま、そゆこと」

「へ理屈だ！」

「へ理屈も立派な理屈の内ってな」

「明久、ここは逃げるぞ！」

「くそっ！」

明久達は教室に背を向けてCクラスから離脱していく

「姐御も逃げてください！！！」

「部下を置いて逃げられるか、お前のFFF団総出で戦うぞ」

そして俺は須川の隣で召喚を行う

4人ほど向こうに行ってしまったがきつと大丈夫だろう

Bクラス	芳野孝之 ^{たかゆき} VS	Fクラス	須川亮&菊井慧汰
数学	161点	VS	41点&179点

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

「させるか！これ以上通すな」

「『『『『ハイ！』』』』」

戦いは結構苦戦していて数人犠牲になってしまった

「姐御……すみません」

そういつてまた一人補習室に連れて行かれる

そこそこ時間は稼げた、皆大丈夫だろうか

「総員退避だ！！」

「させるか！！」

邪魔をされて戻るに戻れない状況になってしまっている

敵は目標を雄二から俺に変えたみたいだ、これでは迂闊に背を向けられない

「姐御、ここは俺達に任せてさっさと逃げてください!!」

いまだ数十人いるFFF団が俺を庇う

「すまないな…後は任せた!!」

俺は部下に頼んでCクラスを後にした

問14 部下と俺と防衛線？（後書き）

今回も話が急ですね、今更ながらまだ書けるのではないかと思っています・・・

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想お待ちしております

問15 根本と写真と戦争準備(前書き)

PV30000突破、ユニーク5000突破ありがとうございます
文才の無いキモヲタですが楽しんで行ってもらえたら嬉しいです

問15 根本と写真と戦争準備

問

何故『私』がこのような痛みを感じたのか答えなさい
父が沈痛の面持ちで私に告げた

「彼は今朝早くに出て行った。もう忘れなさい」
その話を聞いた時、私は身を引き裂かれるような痛みを感じた。彼のことはなんとも思っていなかった。

彼がどうなるうとも知ったことではなかった。私と彼は何の関係もない。

そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ち揺れるのだろう

姫路瑞希の答え

私にとって彼は自分の半身のように大切な存在であったから

菊井慧汰の答え

私にとって彼は半身のように大切な存在であったから

教師のコメント

そうですね。自分の半身のように大切であった為、いなくなったことで『私』はまさに身を引き裂かれたような痛みを感じたということとです

吉井明久の答え

私にとって彼は自分の下半身のように大切な存在だったから

教師のコメント

どうして下半身に限定するのですか

土屋康太の答え

私にとって彼は下半身の存在だったから

教師のコメント

その認識はあんまりだと思います

「皆、大丈夫か？」

「お、慧汰。無事みたいだな」

「慧汰のおかげであまり敵がこなかったよ」

「そうか」

教室に入って皆の生存を確認する

しかし残っていた部下

じゃなくてFFF団の状態が気になっ

てしょうがない

「……………姐御、ご無事で……………」

そう思っているとCクラスに残していった皆が帰ってくる

「お前らもな、本当によかった……………」

皆が無事なのを確認して安心したのか気が抜けた

「本当に部下のようじゃの……………」

「秀吉、どうしようかこの呼び名慣れてしまったんだ」

「その気持ちが分かってしまうワシも変な気分じゃ」

秀吉も何か変な呼び名で呼ばれているようだ、一回聞いてみたいな

「話は戻すが今回根本が小山と関係あるのが分かった。こうなればCクラスも敵だ同盟戦がない以上は連載という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

「どうする？このままではCクラスにやられるぞ」

「そっじゃな……………」

「心配するな」

雄二は何か策があるようだ自身たっぷりの顔をしている

「向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はこれで解散になった

ブルルルルル

(紅音から逃げて) 一人下校しようと思つて校門を出るところで携帯が鳴る、確認すると覚えのない番号だ

「もしもし、誰ですか？」

「やあ、Bクラス代表の根本だ」

「何故お前が俺の番号知っている？」

「そんなもの探せば出るだろ」

「……用件は何だ？」

声を荒げて根本に聞く

「まあまあそんなに怒るなよ、まあ話があるから体育館裏に來い」

携帯を切り体育館裏に向かう

根本に呼ばれたとおり体育館裏に着くとそこには根本一人が立っていた

「それで話は？」

「おやおや随分俺は嫌われてるみたいだな」

ふざけた様子で応答する根本

「話つてのは、お前は俺にわざと負けろつてことだ」

「何を言っているんだお前にわざと負けなきゃいけないんだ。それとそれだと協定違反じゃないのか？」

「先に協定を破つたのはソツチだろ？」

まださっきの事を盾に使うらしいここまで小物だと哀れに思えてくる

「俺がそんな話受け入れると思うか？」

「ああ受け入れるかと思っっている、だってお前には拒否権がないからな」

「何を言っている？」

根本は制服の内ポケットに手を入れ写真を取り出す

「これがバラ撒かれたくなかったら俺の言つとおりにするんだな」

見せられた写真は俺が紅音の手錠をバッグに繋がれて連行されている写真だ（問11 午後と作戦と幼馴染 参照）

「どこでそれを!？」

「まさかお前がこんな変態趣味だったとわな。で、どうなんだ？話を聞くのか？聞かないのか？バラ撒かれたくなかったら聞くしかないよな？」

「……分かった」

「そうか、菊井が賢明で良かった、今回の事は誰にも話すなよ？話したらすぐに学校中にバラ撒くからな」

そうやって根本は体育館裏から離れて学校を出ていった、少し後をつけるべくクラス小山と一緒に下校しているのが見えた

あいつがこういうやり方だったら俺は俺なりのやり方でやらしてもらおう雄二には悪いが少し単独行動をとらせてもらう

俺は周りに誰もいないのを確認して電話をかける

「……………誰だ？」

「俺だムツツリー二、頼みたいことがある」

「昨日言っていた作戦を実行する」

日付が変わり翌日、登校してきた俺達に雄二はそう告げた

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

現在は八時半、戦争まであと三十分ある

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

雄二が鞆かばんから取り出したのは赤と黒を基調にしたブレザータイプのこの学校の女子制服、どこで手に入れたのかは聞かないでおこう

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするのじゃ？」

「秀吉、自分は男だと言い張るのだったら構うところだぞ。」

「そうなのかの？何分演劇部で慣れてしまったからのう…」

そういえば演劇部所属だったな、演劇部で慣れたって普段女性役でもやってるのか？

しかし秀吉が女物の制服を着ると本当に違和感が無くなってしまっ

「秀吉には木下優子きのしたゆうことして、Aクラスの使者を装ってもらっ

木下優子、秀吉の双子の姉でAクラスに所属。一卵性双生児のはずだがよく似ている

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取った秀吉はその場で着替え始める

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

さすがはムツツリー二でも言おうか、もの凄い速さでシャッターを切っている、そこまで速いと指もげないか？

「よし、着替えが終わったぞい。ん？皆どうした？」

「さあな？俺にもよくわからん」

「おかしな連中じゃのう」

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「あ、僕も行くよ」

雄一と明久と秀吉が教室を出てCクラスへと向かう

三人がちゃんと教室を出たのを見送り、ムツツリーニの近くに行く

「で、昨日電話した要件は出来たか？」

「……………（コクリ）」

ムツツリーニは目の奥に怒りが混じりながら数十枚の写真と小型録音器を俺に渡してくる

ムツツリーニはこの手の仕事では信頼して頼める

「……………慧汰にはいつも世話になっている今回の報酬はいらない」

「そうか、ありがとう」

ムツツリーニの言葉に色々な含みを感じられるが、とりあえずお礼だけでも言っておこう

「……………（パシャパシャ！）」

「どうしたムツツリーニ、俺の顔なんか撮って」

「……………慧汰のかすかに微笑む顔、これは高く売れる」

「今小声で、すごく聞き流せない言葉が聞こえてきたんだが」

今度コイツの売っている物を見せてもらったほうがいいかもしれない

そうこうしている間に秀吉達は作戦が終わったのか戻ってきた

そろそろこっちも準備でもするか

問15 根本と写真と戦争準備（後書き）

慧汰は一体何を準備するんでしょうかね？

誤字脱字の報告、アドバイスや感想お待ちしています

問16 へ理屈(?)と裏切りと盗聴と(前書き)

今回これで今年最後の投稿になります
来年もどうか見てください

問16 へ理屈(?)と裏切りと盗聴と

問

以下の英文を訳しなさい

Although John tried to take the
airplane for Jaran with his
wife's hand made lunch,
he noticed that he forgot pas-
s port on the way

姫路瑞希の答え

ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、途中でパスポートを忘れていることに気がついた

教師のコメント

はい正解です

土屋康太の答え

ジャンは

教師のコメント

ジョンです

吉井明久の答え

ジョンは手作りのパスポートで日本行きの飛行機に乗った

教師のコメント

手作りのパスポートという言葉の意味をもつ一度よく考えてみて下さい

菊井慧汰の答え

日本語で書いてください

教師のコメント

それを書いたら答えになります

俺は雄二に声をかけて皆を集める

「で？話つてのはなんだ？」

「慧汰は根本の目の前にいるんだから、すぐ終わるんでしょ？」

「いや、そういう訳にはいかなかった。少し時間がかかりそうだ」

「え？何かあったの？」

「これは俺の口からは何も言えない…がこれで説明しよう」

俺は自分の制服から携帯を取り出し録音再生ボタンを押す

「《お前は俺にわざと負ける》《先に協定を破ったのはソッチだろ？》《お前には拒否権がないからな》《今回の事は誰にも話すなよ？話したらすぐに学校中にバラ撒くからな》」

最近は便利になったものだ、昨日根本が怪しかったから携帯に録音して行ってよかった

「なるほどのう、それにしても根本は本当に酷い奴じゃのう」

「それで話はこれだけか？」

「まさか、これからが本番。話って言うのは」

9時になる少し前昨日と同じ状況にするためにBクラスへと向かう

「じゃあ須川よろしく頼む」

「姐御、本当にいいのか？」

ついに須川からも姐御と呼ばれるとわ、俺は正真正銘の男なのに

「ああ作戦通りにな。安心しろ大丈夫だ」

「やああ菊井ちゃん、昨日のことは覚えているよね？」

「ああ、覚えているよ」

俺は根本と向き合う、Bクラスに勝ったときに一生の思い出になるようなこととしてやる

時計の針が9時になり戦争が始まる

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

俺と根本も召喚獣をだして戦闘を始める

Bクラス	根本恭二	V S	Fクラス	菊井慧汰
国語	215点	V S		523点

文系を指定したのは大方文系おおかたが得意な俺に戦闘で勝てたら自分の株が上がるでも思っていたのだろう、悲しいかなもともと株が0の奴に上がることはないのに

「な！？昨日から点数は補充してないはずだろ！？」

「もちろんしていないが？」

廊下側の状況を見ると召喚はしているが戦闘はほとんど行われていない

先生もこの状況に戸惑いが隠せないらしい

ここまでは作戦通り。後はBクラスの生徒達がちゃんと言ったとおりしてくれるかが問題だ

攻撃は単調で簡単にあしらえる

「クソ!!」

根本がイライラしてきている、こっちは攻撃してないから徐々に点数は減っているがまだまだ余裕がある

「引きこもりぎみのBクラス代表はそろそろお疲れかな？」

時間はまだ10時にもなっていないというのにいつのまにか本陣が教室の前にまで来ていた

「隙あり!!」

根本が俺に隙を見つけたと思い一気に攻撃してくるが、間一髪でかわす

「惜しかったな、根本」

「菊井、さつさと言われたとおりにやられるよ!!!!」

とうとう痺れを切らした根本が昨日の事を大声で話してしまう

「あれ？昨日の事話していいのか？」

「あー！」

悪知恵は働くらしいが、冷静さが欠けていたな

「昨日の話ってどういうことだ？」

雄二はさっき聞いたがさも初めて聞きましたよと言つような声で問い詰めてくる

「ああ、これの事だ。」

俺はさっきムツツリー二に貰った小型録音機を取り出し再生する

「《お前は俺にわざと負けろってことだ》、《何を言っているんだお前にわざと負けなきゃいけないんだ》、《俺がそんな話受け入れると思うか？》、《ああ受け入れると思っている》、《だって》、《先に協定を破ったのはソツチだろ？》」

さすがはムツツリー二、録音した携帯を一度再生してそれをまたパソコンで録音し、編集するとは俺はそこで他の準備があるからそこから先は知らないが小型録音機に入れてさらに現実感を出すとは思っていなかった

「き、菊井！約束を破りやがったな！？」

「お前は何を言っているんだ？俺の口から何もいってないぞ？」

「へ、へ理屈」

「『へ理屈も理屈のうち』、まさしくその通りだな。しかし笑えるな自分でいった言葉なのに自分で首を絞めてるんだからな」

これだけで終わらない、さらにムツツリーニの小型録音機を再生させる

流れたのは雑多ざつたの音と音楽が聞こえてくるどうやらどこかの店のようだ

《……それで、Fクラスには勝てそう?》

《余裕さ、あんな屑の集まったクラスに負けるはずがない》

声の主は二人、一人は根本恭二もう一人は小山友香だ

《確かにそうね、でもその屑に負けたDクラスも屑ってことよね》

《その通りだな》

《万が一負けたらどうするの?》

《まさか、Bクラスの奴らを使ってるんだぞ?万が一にも負けないな》

《Bクラスの生徒は使えそう?》

《ああ、使える使える。使える奴等はやっぱりいいな、後で捨てるときにも心が痛みそうだ》

《心にもないくせに》

二人の笑い声が聞こえる、そしてそこで音声は止まった

「いつの間に！？誰がやったんだ！？」

「お前も知っているはずだが？保健体育は主席以上、だがそれ以外は明久以下」

「ムツツリーニイイイイイ！！」

本当に有名なようで

「おいおいBクラスの代表様は俺達を屑呼ばわりしただけでなく、クラスメイトまでも道具扱いしているぞ」

雄二が一気にまくし立てる。Bクラスの生徒も皆根本を睨んでいる

「さつさと戦え！！敵の大將が目の前に来ているんだぞ！？」

やけになった根本が大声で指示を出す誰も聞かない

「随分と嫌われてるみたいだな、根本」

「チィ！！だがお前は俺に勝てない、負けるといふ約束は破れないよな！？」

「確かに俺はお前を倒せないが 須川」

「はい、なんででしょうか？」

「お前にFFF団の頭として聞きたいが、こんな屑にも彼女がいるんだぞ？こいつに対する刑はどうする？」

「な、何を言っている。俺に彼女など」

根本が言い訳をしようとするが意味がない、俺はさらにムツッリー二からもらった数十枚の写真をばら撒く

写真に写っているのは小山と根本、喫茶店や服選びなど色々な写真がある。どこからどう見てもカップルにしか見えない

「彼女がどうした？」

「死刑！！！」

須川達FFF団は覆面とマントを被り（召喚獣も同じようになっていた）一斉に根本に詰め寄る（確認してみたが中に明久とムツッリー二もいた）

「こ、近衛部隊！！」

根本が近衛部隊を呼ぶ、すると近衛部隊の生徒たちは　いやBクラスの生徒全員が根本に駆け寄る

しかしそのままBクラスの生徒達は根本を守らずFFF団全員と根本に攻撃をしかけた

多勢に無勢のこの状況、根本の召喚獣はあっけなく点数0になり戦

争は終結した

問16 へ理屈(?)と裏切りと盗聴と(後書き)

案外あっさりと終わりましたね(滝汗)

皆様大体予想がついたと思います(サブタイトルのせいで)

本当にすみません

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想お待ちしております

特別問題 正月と羽根突きと罰ゲーム？（前書き）

今日は元旦と言っことで本編には全く関係ない話を載せました
本編は明日中に掲載するつもりです

特別問題 正月と羽根突きと罰ゲーム？

特別問

初夢に見ると縁起が良いものを三つ順番通りに上げなさい

菊井慧汰の答え

一富士、二鷹、三茄子

教師のコメント

そのとおりです。この手の問題は流石ですね

花川紅音の答え

慧汰、慧汰、慧汰

教師のコメント

これはあなたにとって縁起がいいものですね、ですが不正解です（
この後教師は大変な目に合わされました）

霧島翔子の答え

雄二、手錠、エプロン

教師のコメント

どこが縁起のいいものか教えてほしいです

土屋康太

シャッターチャンスが増加、売り上げ上昇、行動がバレない

教師のコメント

あなたは何をしているんですか？というかそれは夢じゃないと思います

皆様、新年明けまして

「「おめでとつございます」

えーと本編では出ることの無い（当たり前）キモヲタともうします

「……なんで俺は振袖着せられてるんだ？」

私の隣には主人公の菊井慧汰、ヒロインの花川紅音が来てくれます

「本編ではまだ春なんだけどね」

紅音も空気呼んでください

ピンポン

お、誰か来たようですね

「明けましておめでとう。慧汰、花川さん」

「……………明けおめ」

「明けましておめでとう菊井、花川さん」

「明けましておめでとうです」

「明けましておめでとうじゃな」

どうやらいつものメンバーも来てくれたようで……………あれ雄二は？

「ああ雄二ならあそこじゃ」

秀吉が指を指す先に雄二と翔子さんが腕を組んで

「待て、どう見ても関節極められてるだろ」

「……………カップルは皆こうしてる」

いつもどおりのようで安心しました

「そう言えば姉上を呼ばなくてよかったのかの？」

本編にまだ出てない人は出しません　ムッツリーニ今撮影しても
本編で売れないぞ？

「……………！！！！（ガーン）」

「ムッツリーニ、女達を撮るのは分かるがどうして俺も入ってるんだ？」

何を言ってるんだ？慧汰ならしょうがないだろ

「もともとこんな風にしたキモヲタが・・・」

なら性格も女みたいにしますか

「悪かった」

「慧汰が女口調……………それはそれで良いかも……………」

紅音は結構気に入った御様子で

「二人ともいつもどおりじゃな」

秀吉、何で振袖着てないんだ？

「ワシは男じゃぞ何故着ねばならんだ！？」

秀吉だから、それと慧汰も着てますし

「俺はいつの間にかやられたんだ！！！」

「……………（ワクワク）」

ムッツリーニも楽しみにしてるようですよ！どうですか？

「嫌じゃ！絶対に着ないからの！」

「……………！！！！」（ガガーン）」

ムツツリーニ、ドンマイ

「折角の正月だし何かしないか？」

却下

「何故だ!？」

理由は二つ一つは長くなる。一つは慧汰が無双始める

「確かに慧汰がこんな日本の伝統的な遊びしたら僕達じゃ勝てないよね」

その通り、さすがの明久もしっかり分かってくれたようで

そういえば雄二はまだ向こうで戯れていますね

「これがどう見たら戯れているように見えるんだ!?!どう見ても狩る側と狩られる側の鬼ごっこだろ!?!」

「……………雄二、逃げないで」

「死んでたまるかあああああああああ!?!?!」

本当にいつもどおりですね

「キモヲタ、私だったら慧汰と羽根突きしてもいいわよ」

「だそうですけど慧汰はどうですか？」

「いいだろう、絶対に勝つてやる」

後ろにいかにもゴゴゴゴゴゴって聞こえてきそうな黒いオーラが見えるんですがどれだけ恨みがあるんですか

それと羽根突きは女性がやるものです

さて場所が変わって公園です

今回はちよつと特殊で一回勝負でやります理由は聞かないで下さい

「これは見ものじゃのう」

「……………シャッターチャンスの予感」

「後で売ってね」

「翔子、頼むから話してくれ」

「……………やだ」

「アキ、一緒に見よ？」

「吉井君一緒に見ましょう」

まともなコメントがほとんどないですね

つてもう二人は勝手に始めてますし……

自分振袖であそこまで動ける人を始めてみましたよ

ラリーはどんどん続いてスマツシュをスマツシュで返すほどに……どうして木材から金属を打ち合ってるような音がするんですか？

すみませんいつまでやってるんですか？

朝の早めに始めたのにもう正午少し過ぎてますよ

「負けたら凄い危険な気がするからな」

確かに紅音から尋常じゃない怪しいオーラが見えますからね

「慧汰、早く負けて化粧させなさい！」

すみません羽根突きって墨だった気がするんですが…

「慧汰には墨なんかより化粧の方がずっといい」

なるほど、理解しました

「理解するなよー!!」

さてこちらでは

「……………（パシャパシャパシャパシャー!!）」

一心不乱にシャッターを切り続けるムツツリーニと……………そのカメラ何台目ですか？

何故カメラが山になるほど撮れるのか教えてほしいんですが……………

「……………一秒一秒がシャッターチャンス」

名言（？）（ありがとうございます）

「翔子、この鎖とってくれないか？」

「……………イヤ」

雄二はまだ霧島さんに捕まっているようで、霧島さん御似合いですよ

「……………御似合い」

「頼むからそんな危険な言葉はやめてくれー!!」

どこが危険なんでしょうか？

「吉井君どうしたんですか!?!」

「アキすっかりして!?!」

どうかしましたか？

「私がおせち料理作ってきたので食べてもらっただんですが」

「食べた瞬間に」

なるほど、お疲れ様です

「お茶は美味しいのう」

台詞だけ聞くと本当に老人ですね秀吉は

「そうかの？いたって普通だと思っのじゃが」

普通はそんな喋り方しませんよ？

「そ、そうなのかの？」

本当に秀吉と慧汰は男なんでしょうか？いつも気になります

「俺は男」

寝言は寝て言いましょう

「やった、勝った!!」

そうこうしているうちに決着がついたようですね

さて罰ゲームとして慧汰は紅音に化粧してもらいましょうか

もちろんムツツリー二に撮影してもらいますからね

「……………（グッ!!）」

「ま、待て!!嫌」

さてそろそろ尺もあまり無くなってきましたが

慧汰の化粧が終わったということなので…どうぞ!!

「もう婿に行けない…」

「大丈夫、私が嫁になるから」

出てきたのは薄化粧された慧汰……………この姿で『男だ!!』なんて
言われても絶対に嘘だと思われませうね

まつ毛はもともと長いですし目も切れ目ですし

「……………姐御綺麗です!!」

どうやらFFF団も来ていたようで

特別問題 正月と羽根突きと罰ゲーム？（後書き）

色々駄文になっていましたね、すみません

誤字脱字、アドバイスや感想お待ちしております

問17 縄と女装とプレゼント(前書き)

いつものようにサブタイトルはあまり関係していません

問17 縄と女装とプレゼント

問

以下の問いに答えなさい

観測者Aが速度Aで走っていると、正面から周波数Fの音を発し速度 v' で走行してくる救急車がやってきた。音速をVとした時、観測者にどのような事が起きるのかを書きなさい。また、その現象の名称も併せて答えなさい

姫路瑞希の答え

観測者Aには、車が発する音の周波数が $f \frac{V + v'}{V - v'}$ となつて聞こえる。

現象の名称……ドップラー効果

教師のコメント

F1マシンが通過する時もこれと同様の現象が起こっていますね。物理現象は一見難しい様に思われますが、意外と身近に存在するものです。

菊井慧汰の答え

観測者Aには、車が発する音の周波数が $f \frac{V + v'}{V - v'}$ となつて聞こえる。

現象の名称……(多分)交通事故

教師のコメント

多分ではなく絶対に違います。

吉井明久の答え

観測者Aが速度 v' + v で撥ねられる。

現象の名称……交通事故

教師のコメント

きちんと相対速度を補正しているあたりが腹立たしいです

「慧汰これは一体どういうことだ？」

後ろから雄二の声が聞こえてくる

「何がだ？」

「何がだ？じゃないだろどうしてFFF団だけじゃなくBクラスの生徒全員が根本に攻撃をしたのか聞いているんだ。朝のお前の作戦からしてこれはお前の仕業だろ？」

俺が朝Fクラスの皆に言った作戦は唯一つ。『Bクラスの生徒と戦闘するな』ただそれだけだ

後は昨日のうちにBクラスの奴らと連絡を取り合って打ち合わせをしていたからその通りにやっただけ

「当たり前だ、そうじゃなきゃここまで余裕じゃないさ」

「Bクラスの奴らに何をした？」

「特に何もしていない。ただムツツリー二の情報網から根本を除くBクラスの生徒全員の電話番号を聞いて不平不満や悩みを聞いただけだ」

包み隠さず昨日の事を言う。本当に疲れた、最後の一人のときはもう11時越えていたからな

「本当にそれだけか？」

「いや、流石にソレだけだったらここまで出来ないさ。雄二、何故Bクラスの生徒は今回の戦争で根本の言いなりになっていたと思う？」

「そりゃ代表権限じゃないのか？」

「確かにそれもあるが違う本当はFクラスに負けたら設備を交換され設備が最低ランクになるということだ」

「それでお前は何を話した？」

「お前なら大体見当はついているだろ？まあ話すが簡単に言えばお前が昨日俺達に話したことを伝えた」

「話したこと？」

雄二はまだ納得がいかないようで眉間に皺しわを寄せている

「仮にこの戦争でFクラスに負けても設備は交換しない、だがその代わりにある条件を飲んでもらう。もし出来なかつたら設備は交換するってな。それを言ったら全員からいいぞもつとやれって返ってきた」

「何を言った？」

「条件は根本が女装してAクラスへの使者になる、そしてその後色々コスプレさせて弱みを握ろうってな」

「確かにそれは面白そうだな、だがそこまで行くのに時間がかかったんじゃないか？」

「確かに時間はかかったが皆納得してくれた」

「これから交渉は明久じゃなくてお前に行かせたほうがいい気がするな」

「やめてくれ、やめてください」

本当にそれだけはやめてほしい

「何か」

「姐御！！言われたとおり根本の屑野郎に不満をぶつけられました
！！！」

「お前Bクラスの男子からも姐御って慕われてるって本当に……ダ
メだ腹痛い」

腹を押さえながら盛大に笑う雄二

「お姉さま！！この屑をしっかりと縄で縛りました」

これはDクラスの清水が島田に言っていない。Bクラス的女子が俺
に言っているのだ

後ろで雄二がさらに笑っている

「皆、コイツも捕まえてAクラスに投げ込むぞ！！」

縄に『霧島さんへ』って書けば大体察してくれるだろう

俺が言うや否や皆雄二に突っ込み羽交い絞めにして縄を縛りAクラ
スに持っついていこうとする

「やめろ！！俺が悪かった、だからやめてくれ！！」

「……………もしもし霧島さん？」

「お前本当に許す気ないだろ！？」

「当たり前だ」

コイツは絶対に地獄に落としてやる、俺は霧島に謝り電話を切る

「皆雄二を落としてやれ」

さらに俺が言うと皆胴上げ状態の雄二をパッと手を離し受身のとれない雄二は重力にしたがってそのまま床に打ち付けられる

「テメエ……後で殺す！」

『姐御（お姉さま）は殺させません！！』

こいつ等は本当に忠誠心があるようで

「お前はこいつらに何を言った？」

雄二の言っていることはもっともだと思う何故ならたった一日で本当に軍隊のように連携がとれているのだから

「いや、俺は特に何も言っていないただ皆の悩みを聞いた後皆に『悩みがあるんだったら俺に相談しろ、少ししか力になれないかもしれないが一人で悩むよりはいいと思うぞ』って言ったただけだ」

「多分そんな時のお前はカリスマが溢れてたんだろっな」

「そんなことないと思うんだが……」

多分そんなことはないはず、いやない俺に限ってそんなことは絶対にない

「でないとこんな状況どう説明するんだ？」

「さあ？そういえば早く根本と交渉しないと根本があそこで一人ポツーンと縄に縛られている変態だぞ？」

さつきから向こうで皆からも無視された一人孤立している根本が見える、

さつきまで余裕だったのに今ではそのザマ、本当に滑稽だ

「別にいいんじゃないだろ、根本だし」

「別にいいが交渉はしような」

「それはそうだな」

雄二は根本のほうに向かい俺もその後ろをついて行く、すると何故かFFF団とBクラス生徒も俺の後ろについてくる

「用件は何だ？」

「まあ別に用件を言うだけなら俺が言ってもいいんだが今回はコイツに任せる」

そう言って雄二は俺が根本の前に来るように促す

俺は根本の前に向かい縄で縛られている根本を見下す

「よお根本今どんな気分だ？使える道具に裏切られ、屑に見下される気分は」

根本が悪いはずなのに何故だろう。凄いいこっちが悪い者のような気分になっってくる

「…………ツ!」

本当に悔しいんだろう、瞳の奥に怒りと殺気を孕ませながら俺を睨みつける

「用件は何だ？」

「用件は簡単だ。今日一日中俺の言ったとおりに行動しろ」

「どづいつことだ？」

「あれ？Bクラス代表になるほどの頭脳を持つお前が今の言葉で分からなかったのか？簡単に言えば今日お前に自由は無いつてことだ」

「…………何を考えている？」

「別にお前が知る必要はないだろう…………じゃあ皆よろしく!」

『ハイ!』

俺の号令でBクラスの生徒達は根本を取り巻きは縄を解き制服を脱がし始める

「ま、やめろ!何をするつもりだ!？」

「とりあえず手始めにお前は女装してAクラスに行ってししよっせんそう試召競争の

準備が出来てると言っ
てこい」

「ふざけるな！！俺がそんなことを……ぐふう！！」

取り巻きの一人の男子が下腹部よりやや下の男の急所に思いっきり蹴りをいれるそれをくらった根本は口から泡を吹いて倒れる。どうやら気絶したようだ

「姐御、とりあえず黙らせました！」

「じゃあ早速着付けに移りたいんだが、誰かやってくれるか？」

「お姉さま、私がやります」

Bクラスの女子が提案をしてくれる、何故だろうさつきからお姉さまと言われて違和感が無い。人間の順応性にはビックリだ

「そうか、じゃあ頼む」

「はい！！頑張ります！！」

嬉しそうに気絶している根本に駆け寄り着付けを始める

ん？あのブレザーから見える便箋は……？

「ちょっとそのブレザー貸してくれないか？」

「はい、どうぞ」

「ジュン快くブレザーを渡してくれる

俺はすぐに便箋を抜き取り、明久に話しかける

「なあ明久、これ根本のブレザーから出てきたんだが誰のか分かるか？」

「こ、これは！？どうりで今日元気が……大丈夫だよ慧汰、僕に心当たりがあるからしっかり渡してくるよ」

「そうか、頼んだ」

そう言っつて明久は人の山を掻き分け一団から抜け出す

「さておい誰かその根本のズボンを取ってきてくれ」

「姐御、こんな物どうするんですか？」

そう言っつて男子の一人が渡してくれる

「あいつの制服を捨てようと思っつてな」

俺は教室を抜け出して一番地味で見つかりにくいゴミ箱に投げ捨てる、そしてそのあと石鹸で丁寧に手を洗う

俺が戻ったときにはもう着替えが終わっつていて、根本が意識を取り戻っつていた

「菊井、このスカートヤケに短いぞ！！」

「根本、それ終わっつたらこれもやれよ」

根本の言葉を無視してさらにメモを渡す

「誰がそんなことするか!!」

「じゃあ交渉を破ったことで校内に言いふらしてさらにお前の地位を下げるか？言っておくがBクラスにお前の味方はいないぞ」

「……覚えてろ!!」

いかにも小悪党な台詞を吐き捨ててBクラスの男子二人に連行される

さて午後の授業も終わり下校時間だ

『菊井覚えてろおおおおお!!』

今日何度か聞いた根本の絶叫がまた聞こえてくる

「慧汰、Bクラスに勝ったんだって？」

「うお!?!……ビックリした紅音か。勝ったけどそれがどうかしたのか？」

本当に心臓に悪い、気がいたらいつも後ろか隣にいるんだから

「凄いね、あんな人達で勝てるんだから。代表が良いのか慧汰の策が良いのか…どっちなんでしょうね？」

「今回は慧汰のおかげだ」

前から雄二が歩いてくる

「やっぱりね」

「何か知ってるのか？」

「うん、だって昨日慧汰が話してたから」

「ちょっといいか？」

「何？」

「昨日お前とロクに話してないし今回の戦争については一言も言っていないはずだが？」

「そうだね、でもちゃんと聴いたよ？」

「お前…何をした？」

「ちょっと慧汰の部屋に盗聴機を仕掛けたから」

「お前俺の家にどうやって上がった？それに盗聴機とかプライバシーの侵害だろ！！」

コイツのことだから盗聴機の数は二桁はいくかもしれない、それを全て外さないと俺の行動がコイツに筒抜けになる

毎日コイツが俺を監視しているとなると本当に危険だ

「家が上がったってちゃんと玄関の鍵を開けて入ったわよ？」

「ピッキングでもしたのか？」

「何を言ってるの？それなら不法侵入じゃない。ちゃんと合鍵を使って入ったわよ」

「その鍵はどうやって手に入れた？」

「あなたのお義母かあさんからちゃんと貰ったの」

もう嫌だ、まさか家族の中に共犯者がいようとは、今度から一人暮らししたほうがいいのかもわからない

「あと慧汰の部屋にカメラも仕掛けてるから」

一人暮らしをしよう。そうしないと俺には平穏がこないようだ

「……慧汰も大変だな」

「雄二……」

「本当にお前が苦しんでるところが見れて俺は楽しいぞ」

「……もしも霧島さんですか？雄二がやっと霧島さんと結婚」

「ないことばかり言ってるじゃねえ!!」

「雄二、おめでとつ」

紅音も少し笑って言う、普段もそんな感じの明るい顔してたら可愛いのに

「……じゃあ慧汰、次は私達よね。挙式はどこで挙げる？それとも翔子ちゃん達と一緒に挙げる？」

前言撤回、同じ笑い方なのに目が死んでるのは怖すぎる

「とりあえず法律的に結婚できないのは知ってるだろ」

「じゃあ婚約」

「婚約もしない」

コイツと一緒に暮らしたら本当に早死にする、多分過労死

「……そう、まあいいわ。後で絶対に『結婚しよう!!』って言わせるから」

「絶対に言わない」

絶対に言わない、言ったが最期本当に終わる

今気がついたのだが、雄二の姿が見えない

「だからお前とは結婚しないって言ってるだろ!!」

「……………雄二、素直じゃない」

「ぎゃああああああああああああああ!!」

あつちはあつちで修羅場のようだ

あれ？一度こんな状況見たことがある気がする

「まあ紅音、今日は（根本が苦しんで）気分もいいし一緒に帰るか」

「……………」

「どうしたんだ？急に固まって」

「慧汰と一緒に帰ろうって言ってくれた。いつつも私から逃げてるのに、これはもうすぐ結婚ってことよね……………」

「すまん、やっぱり一人で帰る」

途中から聞こえなかったが、これ以上聞いたら大変なことになると
思う

「あ、慧汰。ちょっと待ちなさい」

後ろからもの凄い勢いで走ってくる紅音、もしかしたらオリンピック
クメメダリストのボルンと互角に張り合えるんじゃないか？

「捕まっただまるかああああ!!」

結局いつもの下校と変わらなかった

問17 縄と女装とプレゼント（後書き）

この話を書き終わったときに思ったのが

「この話だけ長い！！」でした（滝汗）

読みづらくてすみません

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想お待ちしております

問18 百合と男の敵とシステムデスク（前書き）

火曜日は申し訳ありませんでした、詳細は活動報告に書いております…

サブタイトルは関係ありません

問18 百合と男の敵とシステムデスク

問

次に示す四字熟語の漢字を答え、適切な例文を作りなさい
あいまいもこ

姫路瑞希の答え

漢字 曖昧模糊

例文 責任の所在が曖昧模糊としていた

教師のコメント

あやふやではつきりしないさまをあらわす四字熟語ですね。読める人は多いのですが、書ける人はそう多くありません。よく出来ました

264

菊井慧汰の答え

漢字 曖昧模糊

例文 この報告書は曖昧模糊としていてよく分からない

他にも類義語では、あるのかないのかはつきりしないこと。いいかげんなことを意味する有耶無耶うやむやや霧が深く方角がわからないように、物事の手がかりがつかめず困惑している状態のたとえを意味する五里霧中りむちゅう、限りなく広い様子やとりとめのない様子を表す空々漠々くうくうぼくぼく、他には

教師のコメント
もういいです

吉井明久の答え
漢字 合間妹子

教師のコメント
なんとか答えようという気持ちだけは伝わってきました

土屋康太
例文 小野小町・小野妹子・合間妹子の日本三大美女は遣隋使として旅立った

教師のコメント
一名男性が混ざっているので気をつけて下さい

昨日の点数補給テストを終えてBクラス戦から二日後の朝

後はAクラス戦の俺達Fクラスは作戦会議をしていた

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと思われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

壇上にいる雄二が俺達に頭を下げるだと？

「ゆ、雄二どうしたのさ。らしくないよ?」

どうやら明久もこれには違和感があるようだ

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「もしかして、頭締め付けられておかしくなったか?」

いつも霧島にアイアンクローやられて出血してるからな

「ああ、それか……慧汰ありがとう。理由が分かった」

雄二も思い当たるようで本当に苦勞してるんだな、こっちとしては楽しいから良いんだが

「まあいい、ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ!」

『おおー!』

『そっだー!』

『勉強だけじゃねえんだー!!』

「雄二、水をさすようで悪いんだが。今回Aクラス戦は一騎打ちじゃないのか?」

『一騎打ち? どういうことだ?』

予想外の俺の言葉によりクラスの皆がざわつき始める

「慧汰が先に言った様に今回のAクラス戦では一騎打ちで決着をつけたいと思っている」

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか』

「落ち着いて」

「皆さつさと落ち着け、今まで雄二の作戦で勝ってきたんだ今回も雄二の作戦でいこう。だが負けたときは罰を与えればいい」

雄二がなだめようとする時にちょうど俺も出してしまった

『分かりました、姐御!!』

「お前の罰に心当たりがあって怖いんだが」

「だったら勝てよ、代表サマ?」

俺は最高の（黒い）笑顔で雄二を見る

「まあいい、今回の一騎討ちについて説明する。まずやるのは当然俺と翔子だ」

Aクラスの代表とFクラスの代表。確かに締めとしては面白そうだが

「馬鹿の雄二が勝てるわけなああ！！」

俺の思ったことを先に言ってくれた明久

雄二は明久に向かってカッターを投げて明久の頬をかすめる。おしい

「次は耳だ」

次は耳と言いながら目に当てると信じている

「まあ、明久の言うとおり翔子は強い。まともにはやりあえば勝ち目はないのかもしれない。だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？まともにはやりあえば俺達に勝ち目がなかった。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

珍しく雄二の言葉に熱が入る

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を今皆に見せてやる」

『おおー！！！！』

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ?」

「フィールド? 何の教科でやるつもりじゃ?」

「日本史だ」

「雄二、やっぱり代表とは俺にやらせる。絶対に勝つ」

日本史は、いや文系は俺の専売特許だ絶対に勝てる

「いや、それは無理だ」

「何故だ? 霧島に苦手教科もないしお前が日本史が得意なわけでもない」

「勝つためだ」

雄二の言ったその言葉は純粹だが一番強い意志を秘めた言葉だった

「……………わかった。その変わり負けたら俺の部下（FFF団+根本を除くBクラスの生徒）総出でお前を殺す」

「もう完全に部下なんじゃな」

「別に負けるために日本史を選んだんじゃない。内容は限定するしレベルは小学生程度で方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負とする」

「訳がわからない、その条件ならまず満点が前提になる。同点なら延長戦だ、そうなれば雄二には不利だ」

延長戦に入ればまず雄二は負ける、何故ならblankがあり尚且つなおか歴史は暗記だ少しでも間が空くと忘れていく。そんな状況下でまだ勝てる見込みがあるのか？

「確かに慧汰の言うとおりじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「???それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

確かに教師の監視下での妨害などではアイツは揺るがない

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

「俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

あいつが絶対に間違える問題？

「その問題は 『大化の改新』」

「大化の改新だと？西暦何年何月に誰が行ったのか説明しろとかか？そんな問題小学生程度なら出ないだろ」

「西暦何年何月は出ないだろ、出たとしても出来るのはお前くらいだ。小学生レベルの問題だからもっと単純だ」

「単純と言うと 何年に起きた、とかかのう？」

「おつ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ。」

「雄二、さっき俺が言ったやつとあまり変わらないぞ？」

「だから何月までは出ないって言ってるだろ」

呆れた顔で俺を見る雄二、馬鹿にされた気分だ

「まあいい、大化の改新がおきたのは645年。こんな簡単な問題明久ですら間違えない。だが翔子は間違える、これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とはおさらばって寸法だ」

そんな簡単にいけばいいが実際どうなることか

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……中が良いんですか？」

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員、狙ええ!!!」

「な!?なぜ明久の号令で皆が急に上履きに構える!?!」

「黙れ、男の敵! Aクラスの前にキサマを殺す!」

本当に男の嫉妬は見苦しいな

「俺が一体何をしたと!?!」

「遺言ゆいごんはそれだけか? ……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

「皆、菊井も花川と幼馴染だぞ!?!」

「雄二、俺も巻き添えにするつもりか!?!」

紅音も結構美人だから男生徒から人気がある、結構マゾヒストに偏ってるがな

『……………花川さんと姐御の百合だと!?!?』

『花川さんが責めで姐御が強気受』

「……………(ブシャアアア!?!?!)」

「ふざけんな！…色々ツッコミどころが多すぎてツッコメねえよ
！」

何で男なのにまず最初に百合が出て来るんだよ、それに責めとか訳
が分からないし……ムツツリーニ、その輸血用のパックじゃ足りな
いんじゃないか？

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんや花川さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」

「え？何で姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美
波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようと
しているの！？」

どンドン教室の空気が混沌としていく……これがFクラスの良い所
なのか悪い所なのか…

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

手を叩いて場を沈める秀吉、コイツが冷静でよかった。もしいな
かったら鉄人が来てやっとなら終わってたろうな

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

「そつえば霧島は雄二のことが一途に好きだけなのに百合疑惑が出てるんだよな。可愛そうに」

「むしろ、興味があるとすれば……」

「……そうだね」

皆の視線がある一人に集まる

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

大丈夫だ姫路、お前は何もしていないし何もされない

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で小さな頃に間違えて嘘を教えたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

長所を逆手にとるとはいかにも雄二らしいやり方だな

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は」

『システムデスクだ！』

問18 百合と男の敵とシステムデスク(後書き)

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想お待ちしております

問19 話と提案と負けられない戦いがそこにはある(前書き)

連続(?) 投稿です

サブタイトルはスルーの方向で

問19 話と提案と負けられない戦いがそこにはある

問

以下の（ ）にあてはまる歴史上の人物を答えなさい
楽市楽座や閑所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を施したのは（ ）である

姫路瑞希の答え

織田信長

教師のコメント

正解です

菊井慧汰の答え

織田信長

織田信長は楽市楽座の商業政策以外にも

教師のコメント

割愛させていただきます

島田美波の答え

ちゃんまげ

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？

この解答を見て先生は少し不安になりました

吉井明久の答え

ノブ

教師のコメント

ちよっと馴れ馴れしいと思います

「Fクラスの使者として話を付けに来た、花川はいるか？」

「何慧汰？それと花川なんて他人行儀な呼び方じゃなくて名前で呼んでよ」

俺達はAクラスに恒例の宣戦布告をする

今回は俺以外に雄二、ムッツリーニ、秀吉、馬鹿あまひな、島田、姫路でAクラスに来ている

声がする方を見るとすぐまたすぐ隣に紅音がいた

「まるで俺が来るのが分かってたみたいだにそこにいるんだな」

「当たり前でしょ？歩幅と歩く音と」

「それ以上言わなくて良い、それとそこまでいくとホラーだ」

本当にコイツはいろいろと人類を超越してるんじゃないかとたまに思う

「で、話って？」

「俺がFクラスの使者として来たんだ大体分かってるだろ？」

「宣戦布告？」

「そのとおりだ、まあそれ以外に話があるがな」

「まあいいわ、立って話すのもなんだし座って話しましょ？」

俺達は紅音に言われて近くの椅子に座る

「じゃあ早速本題に入るが、今回の戦争では一騎討ちにする」

「一騎討ち？」

「俺達Fクラスは試召戦争として、Aクラスの代表に一騎討ちを申し込む」

「慧汰は何が狙いな？」

「勝つこと意外に何がある？」

争いで負けるために挑むなんてただの馬鹿だ、争うからには勝つ意外に目的はない

Bクラスの代表（笑）みたいに手段は選ばないようなことはしないけどな

「めんどくさい試召戦争終わらせられるからいいんだけど、私達にリスクを負う必要がないじゃない」

「なるほど、リスクを負うほどの何かがあればいいのか、ならもしこの試召戦争でFクラスが負けたらウチの代表が一個何でも言うことを聞くらしいぞ」

「慧汰、そんな話は一度も」

「それじゃ足りないわね」

雄二が話しに割って入ろうとするが紅音が華麗に流して話を続ける

「……………他に何が必要だ？」

「あなた達の代表だけじゃなくて慧汰も一つ私の言うことを聞いてくれたら代表に話しても」

「わかった」

勝てば大丈夫だ、勝てば何もされない

「本当に？でもそつちばつかりの提案じゃ不公平だしこつちからも提案させてもらうわ、代表同士の一騎討ちじゃなくてお互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ちで良い？それと代表と戦うのはそつちの代表何でしょ？」

「ああ、その通りだ」

雄二がすぐさま返答する

「その条件ならこつちからも提案させてほしい五人中三人俺達に教科を選ばしてほしいさすがに全部は虫が良すぎるからな」

いくら格下の相手をするとはいえそこまで甘くはしてくれないだろう

（本当に交渉はお前に任せたほうがいいな）

小声で雄二が俺に話しかけてくる

（今回だけだな、この方法で通じるのは）

（一回で充分だ）

「……………菊井の条件なら受けても良い」

突然静かな声が聞こえてくる、声の主は霧島翔子。本当に気配が感じない

「え？翔子ちゃんいいの？」

「……………うん」

「じゃあこれで交渉成立ね。Fクラスが私達に負けたらあなた達の代表が翔子ちゃんの言うことを一つ聞いて、慧汰が私の言うことを一つなんでも聞く」

これで両方共に負けられない戦いになった

「……………勝負はいつ？」

「雄二いつからにするんだ？」

「そうだな、十時からでいいか？」

「……………わかった」

「じゃあこれで話は終わりだ、教室に戻るか」

「そうだね、皆にも報告しなきゃいけないし」

交渉が終わりAクラスの教室を出る

「そうそうムツツリーニ、わざと負けたらミンチにするからな？」

さっきカメラの調整していたところを見逃せるはずがない

「……………（ブンブンブン）」

「慧汰、負けたら俺とお前は……」

「珍しく弱気だな雄二、勝てばいいだろ？」

それ以上雄二は何も言わなかった

「では、両名共準備は良いですか？」

今回の立会いの先生はAクラス担任で学年主任の高橋先生のようにだ

「ああ」

「……問題ない」

一騎討ちの場所はAクラス。理由は広いからだ

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから」

「私が行く」

向こうは秀吉の姉が出ようとするが紅音が割って入る

「じゃあ俺だな」

さすがに俺が出ないとまずいだろ、これは

「教科はどうしますか？」

「国語でお願いします」

「分かりました……それでは開始してください」

「「サモン試召喚獣」」

問19 話と提案と負けられない戦いがそこにはある(後書き)

短いですし微妙なところで切ってしまいましたね……

誤字脱字、アドバイスや感想お待ちしております

問20 勝負と鎖と明久の本気？

問

【？】と【？】に当てはまる語を答えて下さい

マザー（母）から【？】を取ったら【？】（他人）です

姫路瑞希の答え

マザー（母）から【M】を取ったら【other】（他人）です

教師のコメント

その通りです。Motherから『M』がなくなるとother（他人）という単語になります。

こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう

土屋康太の答え

マザーから【M】を取ったら【S】（他人）です

教師のコメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります

吉井明久の答え

マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるもの】

(他人)です

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか

菊井慧汰の答え

マザー(母)から【血縁】を取ったら【ただの顔見知り】(他人)です

教師のコメント

妙に生々しくてビックリしました

Aクラス 花川紅音 VS Fクラス 菊井慧汰
国語 407点 VS 546点

点数が表示される、点数だけなら俺に分がある

紅音の召喚獣はゴスロリ服とでも言うのか赤と黒のフリフリのつい

たドレスを着ていて武器はレイピア

「やった、この点数差なら慧汰の勝ちだ！」

「いや、これは慧汰が不利だ」

さすがは雄二いつも俺の近くで同じようにやられてる奴は良く分かっている

「え、何で!？」

「見ていれば分かる」

次の瞬間に紅音の召喚獣が俺の召喚獣目掛けて走ってくる

レイピアは細い剣だから振るといふより突くほうが攻撃の主流になっってくる

こっちの武器は刀、突く攻撃を相手に盾にするには細すぎる

「めんどくさい武器だな」

「そう?別にいいと思うけど」

そう良いながらも攻撃の手を緩めない、これだけ突いてくると近づくのも容易ではない

「そろそろ、こっちも攻めるとするか……身変わり」

俺は腕輪能力を使う、身代わりは使用時の向きのまま変わるから紅

音の召喚獣の背後はがら空き

「もらったあ!!!!」

ガキイン!!!と金属と金属がぶつかる音がする

未だに紅音の召喚獣はこっちを向いていない

戦闘に慣れていないはずなのにレイピアで攻撃を受けるなんて細かい動作も出来るはずがない、ならば何かある

刀を見ると数本の鎖に絡まれて動かせない状態だった

「拘束」

紅音の得点は407点ギリギリ腕輪能力を使える範囲だ、しかしコイツの能力はそれだけで厄介すくにも得点を下げて使えないようにしたいところだ

刀を捨てて距離を召喚獣との距離を取る

「……ッ!？」

紅音の召喚獣の袖からさらに何本もの鎖が飛んで来る、懐刀で鎖を弾いても弾いても蛇のように向かってくる

「お前の腕輪能力は『100点あたりに一人の動きを鎖で拘束できる』んじゃないかったか!？」

「そのとおりよ。今の私の点数は407点、慧汰の言い方だったら

四人まで拘束出来るわね。じゃあその四人分の拘束に必要な鎖を一人に集めたら？」

「ッ!？」

さらに刀に使われていた分の鎖もこっちに向かってくる本当に蛇のような動きをする鎖を弾きながら、さらに距離を詰めてきた紅音の攻撃も弾く

圧倒的な攻撃にこちらの点数がどんどん減っていく

「邪魔だあああ!!!」

一気に鎖と紅音を吹き飛ばす、しかしそれでも400点をきらない。

この戦いは負けられない、Fクラスの為にも、自分の為にも

俺の周りの空気が周りよりも冷たくなっていく気がする、周囲の雑音も徐々に聞こえなくなっていく

紅音の召喚獣と紅音を見据える

「やっと集中し始めたみたいね」

再度鎖が向かってくるが遅い、あまりにも遅い。いや、遅く見えてるだけであって本当は速さが変わらない

一本一本次々と来る鎖を順番にかわしていく

そして紅音の召喚獣に走っていく

「これはどう?」

俺の召喚獣の周囲に鎖がドームのような形を作る、そしてその鎖が一気に狭まってくる

「身変わり!」

拘束されかける瞬間に紅音と場所が変わる。俺は鎖を回避し、紅音は自分の鎖に拘束される

拘束自体に点数を削ることが出来ないようだが隙を作れるだけで充分だ

「終わりだ」

懐刀を伸ばし紅音の召喚獣に斬りかかる

「フッフ」

不意に紅音の方から不敵な笑い声が聞こえてくる

次の瞬間に紅音を拘束している鎖が勢いよく広がっていく

そしてさらに数本の鎖が飛んてくる

避けることが出来ずに数本の鎖に捕まり自由が奪われる

「あれで全部じゃなかったのか!？」

「最初から全部出すはずないでしょ、一つ言っただけで一人の拘束に使える鎖の数は三本、今の勝負で使ったのは六本だから二人分ね。もう少し言うて応用すれば拘束する力は弱まるけど鎖一本で一人ずつすることも可能よ？」

今まで弾いてたのは全部で六本、四人分の鎖は十二本。ただでさえめんどくさい鎖をさらに相手にするのは骨が折れる。

「本当に相手にしたくない奴だなお前は、だが負けたら色々俺の人生が終わるからな。身変わり」

再度紅音の召喚獣と場所を変える、だが

「鎖も一緒に場所が変わるのかよ……」

俺の召喚獣は拘束されている状態のまま場所が変わった

武器も移動もろくに出来ないこの状況では勝てない、後は召喚獣があのレイピアに刺されて終わるのだから

「降参する」

「勝者、Aクラスの花川紅音」

「悪い、雄二」

「あんな規格外の能力とアイツが相手ならしょうがない。気にするな」

「そう言いつつ血の涙を流しているのは何故だ？」

雄二の目からは怒りと哀切の混じった視線で血の涙を流していた

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスは物理を選択した、Fクラスからは物理が得意な奴
いないか

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

確かに明久は召喚獣の操作になれている、そうならばいくらか点数が強さになつても分らない と言つても結局点数の差が開きすぎると技術云々の前にやられるけどな

「明久頼んだ、お前だったら大丈夫だ」

「安心しろ明久、俺達はお前を信じている」

俺と雄二が明久に声をかける、これでいつものように乗せられれば
良いんだが

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

乗ってくれたか、さすがは馬鹿……本気ってどういうことだ？

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

当たり前のように話を繋げるその雄二の能力が羨ましい

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

動揺するFクラスの面々に対戦相手の佐藤、大丈夫だいつものハツタリだと思っから

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ。君の予想通りだよ。今まで隠していたけど、実は僕」

大きく息を吸い、もったいつける明久

「ひだりき左利きなんだ」

へーそうなのか、……って勉強関係ないよな？

Aクラス 佐藤美穂^{さとう みほ} VS Fクラス 吉井明久

物理 389点 VS 62点

問20 勝負と鎖と明久の本気？（後書き）

戦闘が淡泊になりすぎてないか心配です、それとまだ挽回出来たのではないかと不安になっています

誤字脱字の連絡、感想やアドバイスお待ちしております

問21 バカとムツツリとセーラー服(前書き)

もう水曜日…だと…？

更新日に投稿できずすみませんでした！！

問21 バカとムッツリとセーラー服

問

次の言葉を正しい英語に直しなさい

ハートフル ラブストーリー

姫路瑞希の答え

h e a r t h u l l o v e s t o r y

教師のコメント

正解です。

映画や本の謳い文句によくみかける単語ですが、たまにh e a r tの部分の間違える人がいます。

身近にある英語なのですが、意外とわかり難いようですね。

ちなみに日本語に訳すと『愛に満ちた恋の物語』となります。是非そのような青春を過ごしてもらいたいと思います

菊井慧汰の答え

h u r t f u l l r o u g h s t o r y

教師のコメント

h u r t ……怪我

f u l l ……一杯の

r o u g h ……荒っぽい

s t o r y ……物語り

確かにこの小説の説明にも使われていますが違つといつことに気がついてください

島田美波

h u r t f u l l r o u g h s t o r y

教師のコメント

あなたもですか、そのようなハートフルラブストーリーを演じるのは貴女あなただけだと思います

霧島翔子の答え

h u r t h u l l r o u g h s t o r y

花川紅音の答え

h u r t h u l l r o u g h s t o r y

教師のコメント

まだいたんですか

明久の点数が62…いつもより10点は増えているな

まあどんぐりの背比べだが、明久にしては頑張ったな

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「島田落ち着け、一応「ギャア！」いつも「グハツ！」より点数は10点「痛い！！」ほど上がっているんだから許してやれ」

「二人ともそう言いながらもフィードバックで痛んでるのに殴るのは勘弁して、慧汰に至っては許す気ないでしょ！？」

「お前が切腹するか、睡眠薬を30錠ほど飲んでくれれば許すぞ？」

「死ななきゃ許してくれないの！？」

「じゃあ譲歩してお前が姫路の料理をフルコースで食べきったら良いぞ」

「むしろ悪化してるよ！」

初戦で負けた俺が言えた義理ではないがさすがにこれは酷いからな

「よし。勝負はここからだ」

「ちょっと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？慧汰それって食べんのか？」

「さあ？もしかしたら美味いんじゃないか？」

「慧汰は絶対に知ってるよね！？」

「知識から抹消した」

「便利な頭だね！？」

「とりあえず落ち着け、バカみただぞ」

「雄二、バカにバカみたと言ってても意味がない。そこら辺は間違えるな」

「二人ともさつきから酷いよ！？」

どこが酷いのか教えてほしい、俺はただ事実を言っただけなのに

「では、三人目の方どうぞ」

呆れた様子の高橋先生、確かにこの騒ぎようじゃしょうがない

「……………（スック）」

静かにムツツリーニが立ち上がる、次は俺達Fクラスが科目を選択する順番だ

コイツは知ってるの通り寡黙なる性識者と呼ばれるほどのムツツリだ、そのおかげか総合科目の内八割は保健体育で補っている

保健体育だけならコイツは誰にも負けない

「じゃ、ボクが行こうかな」

向こうからは黄緑色の髪を短く切った女子が出てきた

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子くわじゅ あいこです。よろしくね」

短く切った髪と少し中性的な顔立ちに男の子のような口調で初めて会って紹介で名前を言う前に「男です」なんて言われたら多分皆信じらるだろう

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

やはりムツツリーニが最も得意な科目を選択する

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？でもボクだってかなり得意なんだよ？……………キミとは違って、実技で、ね？」

実技と言うと人工呼吸とか心臓マッサージか？

心臓マッサージは自動体外式除細動器（AED）が普及してきて少し減ってきているんだよな

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

心臓マッサージを教えるって…そのために一回明久を半死半生状態

にでもコイツはするのかわ？

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

いや、必要だと思っぞ。主にお前らのおかげで

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀し^{かな}そうな顔してるんだが」

「そっかー。残念、じゃあ菊井君は……………女の子には出来ないんだ、ゴメンね」

「君って言ってるのに女ってどんな矛盾だ？」

「そろそろ召喚を開始して下さい」

高橋先生、いろいろゴメンなさい

「はい。試^{サモン}獣召喚っと」

「……………試^{サモン}獣召喚」

二人に似た召喚獣^{おんじゆう}が現れる

ムツツリーニは忍者のような格好に小太刀の二刀流

「なんだあの巨大な斧は!？」

明久が言ったように工藤の召喚獣には召喚獣よりも大きな斧を持って腕輪を付けてセーラー服を着ていた

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤が笑いかけると同時に腕輪が光り召喚獣が動く

巨大な斧に青白い電工をまとわせてあれだけの重そうな物を持ちながらも凄い速さでムツツリーニの召喚獣に接近する

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

「ムツツリーニっ!」

振り上げられた巨大な斧が振り下ろされる

「……………加速」

次の瞬間ムツツリーニにも装備されていた腕輪が光り、召喚獣がブ
しる

「……………え？」

「……………加速、終了」

ムツツリーニが呟く、一呼吸置いて工藤の召喚獣から血が噴き出す

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太
保健体育 446点 VS 572点

これだけの点数を出しておいておいたらもう否定出来ないな

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

「すまん雄二、ムツツリー二つてBクラス戦の時前線に出ていたか？」

もしかしたら真面目にやっていたのかもしれない

「……………」

しばしの沈黙

「そ、そんな……………！この、ボクが……………！」

点数を見たところ確かに自信はあったのだろう、だが相手が悪すぎた

「これで二対一ですね。次の方は？」

首の皮が一枚繋がりに一回安堵するがまだ早かったようだ

問21 バカとムツツリとセーラー服（後書き）

一回の戦闘に一人はさすがに酷いですね…

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想よろしくお願いします！

問22 次席と歴史と大化の改新（前書き）

長らく小説が停滞してしまいすみませんでした
久しぶりの投稿です

しばらくこのようなことになってしまいかもしれませんが長い目で
見てくだされば嬉しいです

問22 次席と歴史と大化の改新

問

以下の問に答えなさい

西暦1492年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで覚えなさい

姫路瑞希の答え

クリストファー・コロンブス

菊井慧汰の答え

クリストファー・コロンブス

教師のコメント

正解です。卵の逸話で有名な偉人ですね。コロンブスという名前は有名ですが、意外とファーストネームが知られていないことが多いです。

意地悪問題のつもりでしたが、姫路さんには関係なかったようですね。よくできました。

後菊井君、これだけ歴史など覚えていれているのですから、英語も保健体育も覚えましょう

菊井慧汰のコメント

英語は俺の人生に関係ないので覚えません
保健体育はなぜか覚えられません

清水美春の答え

コロン・ブス

教師のコメント

フルネームはわかりませんでしたか。コロンブスは一語でファミリーネームであって、コロン・ブスでフルネームというわけではありません。気をつけましょう

島田美波

ブス

過去の偉人になんてことを

「あ、は、はいっ。私ですっ」

先生の声を聞いて姫路が反応する

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから歩み出たのは学年次席で明久のことが大好きな久保利光

「やはり来たか、学年次席」

もしも姫路が高熱を出していなかったら久保は学年で三番目になっていただろう

だがこの数日でFクラスとAクラスの勉強の質は雲泥の差だ

だからこの戦いは事実上で学年次席を決める戦いだ

「ここが一番の心配どころだ」

「ここで姫路が勝てば俺たちは負けて俺と雄二は多分死ぬだろう、だが勝てばお前まで回る。そうすれば勝てるんだろ？」

こっちとしてはもう崖っぷちの状態だから負けたら終わりなんだが、戦争としても人生としても

もしも負けたらアイツに何を言われるんだろう……軽い刑なら嬉し
いんだが

「科目はどうしますか？」

科目の選択権は向こうにある、これは久保の自信がある教科でくる
だろう

「総合科目でお願いします」

得意科目で勝つよりも総合点数で勝負をしかけてきたということは

久保自身もどちらが学年次席の学力か白黒つけたいのだろう

「それでは……はじめてください」

心なしかいつも冷静な高橋先生が少し熱くなっているようにも見える、先生自身もどうやらこの対戦は見逃せないようだ

「「サモン試獣召喚!!」」

二人が同時に召喚獣を呼び出す　だが勝負は一瞬で決まった

Aクラス 久保利光 VS Fクラス 姫路瑞希
総合科目 3997点 VS 4409点

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

Aクラスがざわついている

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」

久保は姫路に尋ねる、ついこの前まで学年次席を争っていた人にご
こまで差を広げられたからしょうがない

「……私、このクラスが好きなんです。人の為に一生懸命な皆のい
るFクラスが」

このクラスは人の幸を物理的な制裁で壊していく奴らだぞ？普通だったら弱みを握ってやっていくのが普通だと言つのに

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

こんなクラスが好きとは世の中変わった奴もいたものだ

「これで二対二です」

いつもは冷静な高橋先生が動揺している、まあここまで急成長されたらしょうがない気もするが

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

「俺の出番だな」

次はいよいよ大将戦、これで俺達の命運（主に俺と雄二）がかかっている

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の宣言を聞いたAクラスがまたざわつき始める

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはなりませんね。少しこのまま待ってください」

高橋先生はノートパソコンを閉じて教室を出て行く

先生の背中を見送り明久と共に雄二に近づく

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ。任された」

「雄二、負けたらどうなってるか分かっているよなあ？」

「満面の真つ黒な笑顔でありえない量の殺気を放つな。……わかっているさ、家庭科室の包丁を使って切腹だろ？」

「ああ、多分問題は上がもみ消してくれるだろう」

「……………(ピッ)」

ムツッリーニが近づいてピースサインを送っている

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

明久のこと？もしかしてこの間のことか？

「はいっ」

元気に返事をする姫路、いつもの雄二には珍しい優しい表情をしている

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

テストを作り終えて戻ってきた高橋先生が二人に声をかける

「……………はい」

「じゃ、行ってくるか」

「はい。行ってらっしゃい。坂本君」

「ああ」

「皆さんはここでモニターを見てください」

高橋先生が言うと、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出されている

少しすると二人が入ってきて席についている

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』
画面から声が聞こえてくる、日本史の飯田先生が問題用紙を裏側に
して二人の机に置く

『不正行為は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかっているぞ』

『では、初めて下さい』

テストが始まる、正真正銘の最後のテストが

「吉井君、菊井君いよいよですね……！」

「そうだね。いよいよだね」

「だがあの問題がなかったら雄二は……」

「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね。でも」

「はい。もし出ていたら」

「うん」

「そうだな」

出ていれば俺達の勝ちだ

不意にディスプレイに問題が映し出される

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

やはり小学生レベルの問題、これくらい誰でも解ける。問題は、大化の改新が出ているのか出ていないのか

さらに問題が映し出されていく

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

「あ………！」

出ていた、大化の改新が

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私たちっ……！」

「うん！これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

「最下層に位置していた僕らの歴史的勝利だ！」

『うおおおっ！』

教室を覆いつくす歓喜の声

問題が全て終わったのか再び画面が視聴覚室に戻る

雄二の解答用紙がズームになって見えた、多分飯田先生がやってくれているのだろう

「……………ん？」

雄二の解答用紙の年号がおかしい、解答が多すぎるほどに間違えている

俺ははまだ歓喜しているクラスメイトを尻目に落ち込む、負けが分かったからだ

いくら霧島が大化の改新を間違えようと他の問題は間違えない

そしてこの戦いでの大前提は雄二が満点をとらないといけないがあれだけ間違えていたら

満点はおろか90にもとどかない

そしてテストが終わり採点結果が映し出される

日本史勝負 限定テスト 100満点
Aクラス 霧島翔子 97点 VS Fクラス 坂本雄二 53点

俺と雄二の切腹が決定した

問22 次席と歴史と大化の改新（後書き）

微妙なところで切ってしまいましたね、次話が短くなってしまっ
も……

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想お待ちしています

問23 条件と告白と雄二の最期（死にません）（前書き）

また間が開いてしまいましたね……すみません

気が付けばユニークアクセスが10000、PVが1000000越えていました

本当にありがとうございます

こんなキモヲタですがこれからもよろしく願います

問23 条件と告白と雄二の最期（死にません）

問

以下の状況を想像して質問に答えなさい

あなたは大好きな彼と二人きりで旅行に行くことになりました。

ところが飛行機に乗っていざ出発、というところで忘れ物に気が付きます。

さて、あなたは一体何を忘れたでしょう？

姫路瑞希の答え

頭痛薬や胃薬などの医療品

教師のコメント

これは『あなたが好きな人に何を求めているか』についてわかる心理テストです。

忘れ物はあなたに欠けているものを表し、忘れても気が付かず出発してしまったということは、一緒にいる彼がそれを補ってくれるとあなたが考えているからなのです

どうやら姫路さんは好きな人に安らぎを求めているようですね

霧島翔子の答え

手錠

花川紅音の答え

首輪

教師のコメント

忘れ物の前に、持って行くこととする時点で間違っています

工藤愛子の答え

下着を穿いていくこと

教師のコメント

あなたは好きな人に何を求めているのですか

「三対二でAクラスの勝利です」

怒りにまみれたFクラスの生徒に締め^しめ^めの言葉を放つ高橋先生

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

「だいたい、53点ってなんだよ！0点ならまだ名前の書き忘れとか考えられるのに、この点数だと」

明久は本当に怒っているようだ、ただ

「明久だったらここまでいかないだろ？」

「それについては否定しない」

「それなら負けてしまった俺も明久も雄二を責めることは出来ない」

「どうして止めるんだ！この馬鹿には喉笛のどがえを引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

身体を張って明久を止める姫路

それはそうと

「雄二、さっき言った通り家庭科室に行こう」

「そうだな、この罪は んで詫びるしかないな」

俺と雄二は視聴覚室を出ようと、ドアへと向かう

ガシ（俺と雄二が何者かに肩を捕まれる音）

ズズズ（それでもなお家庭科室に向かおうとする音）

振り向かずとも肩の骨が粉碎骨折しそうなほどの握力で引き止める
奴などアイツくらいいしかない

俺はあまり神を信じないが、もしいるとしたら神はまだ俺達を苦しめたいらしい

もう、楽にさせてくれ……

「慧汰、どこに行くの？」

「……雄二、約束」

俺達を引き止めていたのは予想通りの紅音と霧島だった

多分この日が人生の分かれ道になるのかもしれない

「分かっている。何でも言え」

雄二、俺はお前の事を忘れることはないだろう

彼女に羨ましいほど愛され、照れ隠しを続けた男……と

「……それじゃ」

少し間を開けて息を吸い口を開く

「……雄二、私と付き合って」

予想通りすぎる言葉だった

「やっぱりな、お前本当に諦めないのか？」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何十回も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他のひとなんて、興味ない」

雄二と一緒にいると何度も見かける会話が続けている

だが今回はいつもと違う状況だ、何故なら

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！話せ！やっぱりこの約束はなかったことに」

ぐいっ　つかつかつか

雄二は霧島に首根っこを掴れて教室を出て行く

『……………』

教室の沈黙が訪れる

「雄二の約束が終わったし皆で帰

「慧汰、私が残ってるわよ？」

話を逸らしてうやむやに終わらそうとしていたのにしっかりと紅音は見逃さずにいた

「……………お前の条件はなんだ？」

「うーんと、まず最初の条件なんだけど」

「最初の？どついうことだ、あの条件だと一つしか出来ないはずだぞ？」

「私がこれから言う三つの事を守りなさい」

「そついうことが……………」

確かに最初の条約だと一つまでまでだがこの紅音が言った条件で三つまで増やしやがった

「それで三つの条件の一つが私と付き合って？」

お前もか……全力でお断りしたいんだが条件のせいで断れない、っ
というか何故疑問系なんだ？

「二つ目はなんだ？」

「毎日一緒に登下校しよ」

これは普通の感じで良かった

「三つ目は？」

「最後は、私と同居」

「それは絶対に拒否する！！」

コイツと同居なんて監禁されているようなものだ

「じゃあ、毎日一緒にお昼ご飯食べよ」

「それならいいが……」

それくらいなら守れるし了承する

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

少し離れたところから鉄人の声が聞こえてくる

「あれ？西村先生。僕らになにか用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習について説明しようと思っただ
我がFクラス？」

「おめでとつ。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に
担任が変わるそつだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ!?!?』

クラスの男子全員が悲鳴をあげる

鉄人は『鬼』と言われるほどに厳しい教育をする先生だからだ

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくると
は正直思わなかった。でもないくらゝ学力が全てではない』と言っ
ても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てでは
ないからといって、ないがしろにして良いものじゃない」

確かに鉄人が言っていることはもつともだ、現代の学歴社会にはこ
れほどまでに武器になるものないだろう

「吉井と菊井。お前らと坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、
開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯。さらには部下を沢山従え
たいつ反乱を起こすかわからないような奴だからな」

鉄人は俺をどんな奴だと思っているんだ？

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今
まで通り楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「俺も今までどおり平凡に暮らしてみせる」

「……お前らに平凡な日常などあったか？」

「……ないな」

Aクラスなら普通に暮らせるかもしれないがFクラスの俺達は毎日が予測不可能な状態だ

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやる」
う

「さて慧汰、今日は帰りに一緒に買い物でもしよ？」

「質問する前から腕を掴んでいるのは何故だ？」

コイツの条件のせいで一緒に帰らなければならぬから結局は一緒に買い物に行くことになるのだが

「に、西村先生！明日からと言わず、補習は今日からやりましょう！思い立ったが仏滅ぶつめつです」

「『吉日きちじつ』だ、バカ」

「そんなことどうでもいいですから！」

明久は明久で何か大変らしい

「慧汰、早くいい？」

さらに腕を引つ張り連れて行くこととする紅音

「わかったよ、だから腕を引つ張るな」

コイツに負けたから文句は言わない、今日くらいはコイツと遊んでもいいと思う

「だからといって腕を組めと言ってるわけじゃない」

文句は言わない

「だからって俗に言うカップルつなぎをしる言ってるんじゃない」

文句は

「いいから早く離れろ!!」

俺がコイツに文句を言わないことは無理なようだ

「……まあいいけど逃げないでね？」

「逃げないからその変なモノをしまえ」

犬の散歩とかに繋げる物を何故今持っていたのか問い詰めたい

「じゃあさっさと行くぞ？遅いと勝手に帰るからな」

「慧汰、ちよつと待って」

後ろから紅音がついてくる、いつもは逃げてばかりだったが少しは

コイツと話すのもいいかもしれない

校舎を出て見上げた桜は未だに満開だった

問23 条件と告白と雄二の最期（死にません）（後書き）

やっと一巻が終わりましね、自分としても長すぎたのではないかと
思います

間が空いたのもありますけどね……はい、言い訳です。本当にすみ
ません

誤字脱字の連絡、感想やアドバイスよろしく願います

問24 休日とご飯といつもの朝(前書き)

今回から数話、オリジナル話を入れます。
問題って難しい…

問24 休日とご飯といつもの朝

問

標準体重と適正エネルギー (kcal) の計算方法を答えなさい

菊井慧汰の答え

標準体重 \parallel 身長 (m) \times 身長 (m) $\times 2.2$

適正エネルギー (kcal) \parallel 標準体重 (kg) $\times 25 \sim 30$ (kcal)

先生のコメント

正解です、これを気にして食生活を見直してもいいですね。

吉井明久の答え

適正エネルギー (kcal) \parallel 砂糖 30g + 塩 30g + 水道水
1? $\times 25 \sim 30$ (kcal)

先生のコメント

あなたは色々と気にしたほうが良いみたいです

ピピピピピピピピピピ

目覚まし時計が朝を告げる、Aクラスとの試召戦争が終わり始めての休日なのだがFクラスは土曜日に補習がある。

「起きるか……ん?」

胸の辺りに違和感。まるで抱きしめられているような感触。

布団を勢いよくめくると

「すう……すう……」

紅音が寝ていた、気持ちよさそうに寝ていた。

「おい、起きる」

「すう……すう……」

紅音をゆすつて起こそうとするが効果がない。

「朝飯作らないといけないんだが」

ウチは毎日母さんと父さんと俺で朝飯を交代で作っている。

実際まだまだ時間はあるから今から作ったら逆に冷めてしまうのでゆっくりしても大丈夫なんだが。

「慧汰の手料理!!!」

勢いよく起きる紅音、今までの俺の苦勞が吹っ飛ばされた気分だ。

「よう紅音」

「おはよ慧汰」

「お前どうやって家に入った？」

「玄関から」

分からない、コイツの手口が分からない。ウチはいつも寝る前に鍵のほかに鎖をかける。こいつがいくら合鍵を持っていようと（問1

7 縄と女装とプレゼント 参照）入れない。

「もしかして鎖でも切ったか？」

「そんなことしないわよ、お母義さんに電話して開けてもらったの。またあの人か……合鍵といい今回といい、今度一回話合う必要がありそうだ。」

「それにしても相変わらず可愛い部屋だね」

「どこがだ？至って普通の部屋だと思うが」

俺の部屋には畳と勉強机、敷き布団に本棚、それと最近流行のフィートノインとアインのぬいぐるみや熊や犬、イルカなどの沢山のぬいぐるみが置いてある。

「普通の男の子はこんなにぬいぐるみ置かないわよ？」

「皆置いてると思うんだが……」

今度秀吉にでも聞いてみよう。きっとあいつなら置いてあるはずだ。

「でも私はいいんだけどね」

「何がだ？」

「普段見せない慧汰の表情見れるし……」

「カメラは全て取り外したはずだが!？」

この前の一件から部屋をくまなく探してカメラと盗聴機を全て取っ
たはずだ。

「いい事教えてあげる、盗撮には見つけさせるダミーと本命で分け
るものよ?」

「この部屋をくまなく探したぞ!？」

「フフフ」

と言うことはこの部屋には未だに数個のカメラ、盗聴機が仕掛けら
れているのか…

「ただ今は探すことが出来ない。そろそろ親が起きてくるので朝飯
を作らないといけない。」

台所へと向かい卵を三個、ベーコンを数枚取り出して手抜き料理（
目玉焼き、ただベーコンを焼いただけ）を作り、また冷蔵庫から豆
腐とワカメ、そして他の保存場所から味噌を取り出して味噌汁を作
る。

後はご飯を盛り付けて終わりだ。

順番に料理を持っていく、どうやら父さんも母さんも起きてきたみ
たいだ。

父さんは普通のサラリーマンで名前は菊井賢治。きくい けんじ

母さんも普通の専業主婦で名前は菊井彼方。きくい かなた

「慧汰、一人分足りないわよ?」

「え?どこが?」

「紅音ちゃんの分」

「お母義さん大丈夫です、慧汰と分け合って食べますので」

「すぐ作ってくるから待ってる」

コイツと同じ飯を食べると何か酷く嫌な気分になる。

ガシッと服の一部を凄いい力で引っ張られる。

「紅音どうした?すぐに作ってくるって言っただろ?」

「そんなことしなくても大丈夫だよ?私は少して充分だから」

「いやいや年頃の女の子が小食だとさすがに体に悪いぞ?」

「大丈夫よ、一日に必要なカロリーと運動した分は取ってるから」

問24 休日とご飯といつもの朝（後書き）

次回に学校です。

誤字脱字の連絡、アドバイスや感想お待ちしています

問25 少しでも笑ってくれたら幸いです(前書き)

やっと次話投稿できました、本当にすみません。

皆さんは地震大丈夫でしたでしょうか？

そんな意味でのこのサブタイトルです。

今回テストはお休みします(思いつきませんでした、すみません)

問25 少しでも笑ってくれたら幸いです

紅音と肩を並べて見慣れた通学路を歩いていく。
少し歩いていると見慣れた後ろ姿が見えた。

「よう明久」

「おはよ吉井君」

「あ、慧汰と花川さん。おはよう」

いつも通りに挨拶を交わす。

「それにしても……」

明久が俺と紅音を覗き込むように見てくる。

その目はなんとというか……おもしろそうなものでも見てるかのよう
な目だ。

「どうした？」

「ただ……いつもの慧汰だったら花川さんから逃げてるのに、今は
いい感じに脇腹に蹴りが入るうううう……!!」

何かふざけたことを言ってきたので蹴りを入れておく、回し蹴りに
は腰の回転が重要だと思う。

「まあ、約束だしな。ただ最後の言葉を撤回させたら今度は俺が殺
されそうだし」

後ろからスタンガンを構えられたら誰でもそうなるだろう。

「慧汰、何で否定するの？もしかして照れてるの？」

「否定するのは当たり前だろう？照れてるわけじゃないしもしも肯
定したらお前には今すぐにもその今手に持っている首輪で何かさ
れそうだしな」

当たり前のようにバッグから隠しながら出すのはやめてほしい、俺
の心臓に悪い。

というか首輪を持ってこないでほしい。俺がいつコイツに拉致され
るかわかったもんじゃやない。

「じゃあ肯定しなかったらこの首輪をつけながら学校まで一緒に行

つてもららうわよ?」

「肯定したらどうするんだ?」

「この手錠を使って慧汰の右腕と私の左腕を繋げる」

どうにかして紅音を普通に戻せないだろうか。いやわりと本気で。

「本当に慧汰は花川さんに愛されていてででで!!!」

「次言ったら今度は首のを一周させるぞ」

「慧汰が言つと冗談が本気にしか聞こえないよ!?!」

「これは本気だぞ」

本気以外にそんなこと口走るはずないだろうが。

「本気で殺すつもりなの!?!」

「ああ」

「二文字で肯定された!!!」

「じゃあ『明久の首を絞った雑巾のように捻る。』これで満足か?」

「全然満足じゃないよ!?!」

「贅沢な奴だな………だったらありもしないことをFFF団に言っぞ?」

「僕には生きることすら贅沢なの!?!」

「もちろん」

バカの利点は楽しいことと飽きないこと、場を和ませることだな。

………結構重要だな。

「相変わらず朝からはっちゃけてるなお前ら」

不意に後ろから声が聞こえてくる。

振り向いて確認すると長身でボクサーのように鍛えられた野生的な顔立ちに、たてがみのように立っている髪。

そして奴隷に使われていそうな手錠を霧島から繋がれていた。

「朝からそういうことしてる雄二には言われたくないな」

「慧汰、これには訳が……」

「そうね。いくらなんでも手錠を繋いで当たり前のように外を歩いている坂本君には言われたくないわね」

「紅音、悪いが今の言葉お前が言える権利がないと思うぞ」

当たり前のように人に首輪をしてこようとしてる奴にその言葉を言う権利がないと思う。

「にしてもお前どうしたんだ？」

さすがに雄二が進んで手錠にかけられることははいだろう。

「ちよつとなあつてな……」

「そうか、ならこれ以上は追求しない。」

「ありがたい」

さすがにこういうのは聞かないほうがいいと思う。とくに紅音が聞くとマネしそうだしな。

「なにがあつたの？」

紅音、その授業でも聞くような態度で聞くなよ。

「本当に聞かないでくれ」

「……実は……」

「翔子は黙ってくれ!!」

「本当に慧汰と雄二はうらやましいね」

「雄二、コイツは一回教育する必要があるんじゃないか？」

「そうだな、徹底的にしないとな……」

「ふ、二人ともやめて!! そんな獲物を見る目で見ないで!!」

「いや、今のお前は獲物だから大丈夫だろう」

これ以外にどんな表情をすればいいというのか。

「ほ、ほらHRの時間まであまり時間ないし急ごうよ!」

全速力で逃げていく明久、ふと携帯で時間を見ると確かにHRまであと4分を切っていた

「ヤバイ!! 全力で走るぞ!!」

俺達も明久の後を全力で追いかけた

……ただ手錠のせいであまり速く走れない雄二を除いて

問25 少しでも笑ってくれたら幸いです(後書き)

なんという強引な終わらせかた……本当にすみません

問26 学校とお昼とこれからどうしてよ(前書き)

ものすごく久々の投稿

本当に申し訳ございません

問26 学校とお昼とこれからどうしてよう

キーンコーン

いつものチャイムが今では死刑宣告の鐘の音に聞こえてくる

「チクシヨウがああ！」

この土曜日の補習授業で鉄人相手に遅刻をするのはもう自殺行為も
いい所だ。

カーンコーン

全力で最後の廊下を走り抜ける。

キーンコーン

「間にあっ
」

「FFF団！明久を入れるな！！」

「イエッサー！姐御！」

教室から勢い良く数十人という数で黒いマントを被った人たちが明
久の行く手を阻む

「え、ちょ！ひどい」

「隙ありい！！」

止まっている明久を後ろから蹴り飛ばす

教室に入った後、未だに手錠のかかっている雄二が教室に入る

カーンコーン

「雄二……手錠どうするんだ？」

「後で翔子に外してもらうしかないだろう」

「朝から皆元気じゃのう」

みかん箱、もとい机の場所を適当に見つけて座ると美少女の秀吉が話しかけてきた

「秀吉、アイツらが元気なだけだ」

朝からあそこまでテンションの高い奴らはアイツらくらいだと思っ

「いや、慧汰も十分テンションが高いんじゃないが……」

「お前ら席に着け！！」

教室に入ってきた鉄人の怒号とも言えるような大声を聴いてクラスメイトはそそくさと席に着く

みかん箱の机で席に着くという表現もおかしいが。

「ん？吉井はどうした？」

「知りません」

「慧汰が知らないはずないよね！？」

ポロポロになった明久が教室の中に入ってくる

「吉井は遅刻か」

「どう見ても遅刻してませんよ！？」

「教室に入っていないだろう？」

「ごもつともである」

「これは慧汰に」

「明久、見苦しいぞ？」

「慧汰があそこになければ絶対間に合ってたからね！？」

これが負け犬の遠吠えという奴か

いつも通りに授業が始まり

何事も無く平和に　なるはずもなく

「吉井君、お昼を作ったので一緒に食べませんか」

この姫路の一言で俺達は衝撃を受け、FFF団は迅速に行動を始める

「待てFFF団」

「しかし姐御、コイツは女子から弁当を食べるといふありえないこと
とが……」

「お前たちはあの化学兵器へんとうを知らないから言えるんだ」

あの兵器の破壊力を知らないこいつらにはただ明久が羨ましいこと
になっていると思うだろう

だがあの事件の当事者の俺達では行動が違う

こちらにすごく困ったような表情でアイコンタクトを送る明久に

「明久、がんばれよ」

突き放す雄二

「……………（バツ）」

ピシッと敬礼をするムツツリー二

「大事にするんじゃないぞ?」

食べた後の体を心配する秀吉

「慧汰は裏切らないよね？」

という視線で涙目で見つめていくる明久

「今日は空が青いなあ」

話を逸らす俺

「裏切り者おおおお！！」

姫路と一緒に屋上へと姿を消した明久

これで危険因子は排除することが出来た

「よし、それじゃ俺達は帰る」

言葉を最後まで紡ぐ前に背筋に悪寒が走る

油の切れた機械のように後ろを振り向くと

そこにはニッコリと笑っている紅音の姿があった

問26 学校とお昼とこれからとつじょう(後書き)

とりあえず先に一言

すみませんでした

活動報告にて少しだけ書いております

誤字脱字などの修正

感想などお待ちしております

これはひどい・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2231p/>

バカとテストと男の娘

2011年12月8日23時49分発行